

戦後70周年記念

伝えたい記憶

～ 私たちの戦争体験～



倉敷市



発刊にあたって

先の大戦が終わって、70年目の節目の年を迎えました。この70年という月日の間、私たちは「戦争」を経験することなく、平和な社会を享受しています。

一方で、世界に目を向けますと、今なお各地で紛争や武力衝突が絶えることはなく、多くの尊い命が犠牲となっていることを忘れてはいけません。

平和な社会の実現は私たち人類の共通の願いであり、その実現に向けて努力して行かなければなりません。倉敷市では、昭和61年に「平和都市宣言」を行い、その趣旨にのっとり、戦争を知らない世代へ、戦争の悲惨さや平和の尊さを伝えていくため、毎年、様々な平和事業を実施してまいりました。

この度、戦後70周年の節目の年を迎えるにあたり、過去の悲惨な戦争を体験された方々から寄せていただいた体験記を、「伝えたい記憶 ～私たちの戦争体験～」として、冊子にまとめ、発行することになりました。

ぜひとも、戦争を知らない、次の世代を担う方々に読んでいただき、戦争の悲惨さ、平和の大切さを少しでも実感していただければと思います。

終わりに、戦争を知らない世代にとって、戦争を体験された方々の記憶は貴重な財産と言えます。このような戦争体験記をお寄せいただいた皆さまに、心からお礼を申し上げます。

平成27年12月 倉敷市長 伊東香織

1 水島空襲

水島空襲体験記	片岡 治恵さん	2
水島空襲	千田 晃さん	5
私のトラウマ “防空壕 ^{ごう} から見た空爆”	大條 一郎さん	8
昭和20年・水島大空襲と艦載機の空襲	大橋 一夫さん	10
「少年の記憶」太平洋戦争と水島の戦場	三宅 啓介さん	13
「水島空襲の真実 ガラガラ音」	吉田 敬治さん	17
三菱重工業水島航空機製作所 爆撃のことほか	金光 秀直さん	20

2 空襲体験

「人生の寄り道」より	松谷 武夫さん	24
東京空襲	大山 陽子さん	28
岡山空襲	斎藤 典子さん	31
戦争体験	大坪 和子さん	34
18歳の夏	和多 孝行さん	37

3 戦中・戦後の体験

私の戦争体験記	大月佐喜代さん	42
戦争の思い出	三宅 正枝さん	44
私の少年時代の疎開体験	岩田 侑三さん	47
戦場へ行かない戦争体験記	吉岡 謙さん	51
戦後七十年の想いを歌に	岡部 学さん	54

戦争の頃の小学生の生活の様子	岡本 末子さん	56
戦時下の大原美術館	赤木 徹志さん	58
航空機工場と航空基地建設の実態	小川 薫さん	62
戦中戦後の体験記	金光 育子さん	66

4 従軍体験

樺太（サハリン）	小林 市雄さん	70
飛行第55戦隊	前田 勝美さん	73
戦車兵	富岡喜美子さん	75
城外実戦体験	田辺 康市さん	78
軍隊生活	岡田 良平さん	81
私の海軍生活	渡邊 莊さん	85
従軍記	沖 悦子さん	89
日本に引き揚げの前後	亀山 茂弘さん	93
パラオ戦記	守分 勝政さん	96
海軍航空隊整備兵	匿名 希望	99

参考 太平洋戦争関係年表

1 水島空襲

【水島空襲の概要】

昭和20年6月22日、午前8時36分、米軍のB29爆撃機110機の大編隊は、三菱重工業水島航空機製作所に襲いかかりました。1時間足らずの間に603トンもの高性能爆弾の雨を降らせ、施設の大部分を破壊しました。

この日は、休業日であったため出勤者が少なく、2万人を超える従業員をかかえた大工場であったにもかかわらず、従業員からは、死者2名、負傷者3名の犠牲者を出すにとどまりました。しかし、工場をねらった爆弾の流れ弾により、周辺住民からも痛ましい犠牲者を出しました。この空襲による犠牲者は、死者11名、重傷者11名、軽傷者35名とされています（岡山県警防課発表）。

この大工場を標的とした水島空襲は、岡山空襲に匹敵する大規模な空襲であったにもかかわらず、軍事機密ということで、空襲を知らせる新聞報道はほんの2～3行のみでした。関係書類は焼却処分されたり、進駐軍に没収されたりして、三菱重工業水島航空機製作所や水島空襲を伝える公的な書類は、ほとんど残っていません。

水島空襲体験記

片岡治恵さん

倉敷市連島町鶴新田は、私の生まれ育った故郷です。江戸末期の文化文政から弘化開を最後に干拓され、360⁽²⁾町歩余りの土地に、3代前の親子が各方面から移住して400戸ほどの戸数があり、殆どが「レンコン」「米麦」「野菜」を主体とした農家でした。東は亀の形をした亀島山が見え、南西には瀬戸内海と高梁川⁽¹⁾河口を土手でさえぎり、夏は海水浴や潮干狩り、北東の大平山には⁽³⁾笹取神社があり、春は桜見物も楽しみ、農家としては地の利や資源に恵まれた静かな田園地帯でした。

昭和15年4月、私は弘化尋常小学校へ入学しました。その時は、教科書も兄達が使った本と同じでしたが、2年生になると連島南国民学校と学校の名前も変り、教科書も新しくなりました。その年の12月8日、大東亜戦争の勃発です。3年生頃になると、運動靴や半紙が買えなくなり、習字も新聞紙に書くので本気で字の練習もできませんでした。4年生頃には、運動靴の代わりに「ワラジ」を母がせめて女の子らしくと、赤と白の布を緒に付けて作ってもらいました。朝履いて下駄箱に入れておくと帰る時には盗られて、履いて帰ることはできませんでした。またこの頃から学芸会も運動会もなくなり、農繁期の田植えや稲刈りなど、出征兵士⁽⁴⁾の家へ手伝いに行かされました。5年生になると、朝新聞配りを強制的にさせられ、もちろん⁽⁵⁾勤労奉仕、ゴルフ場あとや土手の下等を開墾して、さつま芋や小麦等を植え収穫しました。その収穫した作物を生徒が食べたり、頂いたりしたことはありません。

昭和20年4月、6年生になると、毎日⁽⁶⁾鋤や鎌を持って学校に行きました。教科書らしい本もなく、毎日ほとんど田や畑に出ていました。この頃から空襲警報も度々あり、ゴルフ場から小麦を⁽⁷⁾かついで帰っていると、「艦載機」と言う飛行機が屋根の辺りまで下りてきて機関銃で人を撃つので、私たちは慌てて菜の花畑にかくれました。そして岡山⁽⁸⁾の空襲、高松の空襲、福山の空襲もあり、遠く離れていても空を真赤にこがし、まる

で花火を見るようでした。

昭和20年6月22日、水島の航空機製作所が空襲にあった時の事です。空襲警報が鳴るので慌てて家の前の防空壕(9)に入りました。母と弟2人と私の4人です。間もなく真上で「パンパン」と爆弾の破裂する音で、今に防空壕(8)の上に落ちるのかと気が気ではありませんでした。母は黒住教のお経をあげて祈り、弟たちも声一つあげず生きた気がしなかったと言うのはこの様な状況でしょうか。

1時間も続いたと思われる頃、爆発音も止んだので、恐る恐る防空壕(9)から出てみると亀島山の向こうでまっ黒な黒煙が続いていました。「アッ水島の航空機製作所に爆弾が投下されたのだ」、民家には異常がないと、やっと安心しました。大平山と狐島の山に高射砲(10)が設置されていて、その高射砲の破裂する音が防空壕の上で



【空襲後の航空機のエンジン部分】

したのだと分かりました。消防団の団長をしていた父が半鐘台の上で見ている、高射砲が2機撃墜して黒煙をあげながら落ちていったと話していました。その後、潮干狩りに行くと爆弾の破片や機関銃の弾と思われるものがたくさんありました。

その頃は学校で弁当を食べる人は少なく、ほとんどの人が家に食べに帰りました。ご飯ではなく代用食(12)の「すいとん(13)」や「おうどん」等の食事が主体だったからです。また、「産めよ増やせよ」の時代で、5人兄弟だった私の家族も戦争中に弟2人、妹1人と3人増え、着る物も配給で自由には買えず、裸で生まれてくる弟や妹達や私達のために親の衣類を仕立て直して着せる大変な時代でした。農家で忙しいので、私は小学校の間、いつも子守りをして一人遊びができるのはお盆、お正月やお祭りの時だけでした。でも大きな農家だったので、まずい物でもおなかいっぱい食べて、ひもじい思いはしたことはありません。お腹を空かせていた子は大勢いたと思います。8月になると広島、長崎に原子爆弾が投下され、多くの方が死にました。そして8月15日、天皇陛下の玉音放送(14)

で敗戦を知りました。夏休みの宿題だった軍のためにやる干し草を持って行くと、いら
ないと言われて、「あーこれでやっと戦争が終わったんだ」とホッとしました。2学期
からは新聞配りも中止。勉強に専念できて、私にとって楽しい学校になりました。でも、
今まで上級生が行っていた修学旅行もなく、運動会や学芸会もありません。記念の卒業
写真だけが連島南国民学校に通学した証です。卒業したら⁽¹⁵⁾西ノ浦の国民学校の高等科に
入学する人が殆どですが、一部の希望者は受験して県立や私立の中学校や女学校に入学
します。そのための補習が3学期になるとありました。私は⁽¹⁶⁾玉島女学校に行きたかった
のですが、兄弟が多いので諦めていました。すると、3月に先生が、女学校を受験する
よう両親を説得に来てくれました。父は反対したのですが、私が「受験だけでもさせて。
合格しても行かないから。」と言って受験したら合格しました。父も許してくれて県立
玉島女学校の生徒になることができました。でも、それ以降も大変な戦後が続くのです。

-
- 1 文化・文政・弘化…江戸時代の元号。文化(1804～1818年)、文政(1818～1831年)、天保(1831～1845年)、弘化(1845～1848年)。連島町鶴新田地区には、開発された時期により文化開、文政開、天保開、弘化開などの小字名が残っている。
 - 2 町歩…面積の単位。1町歩 9917.36平方メートル。360町歩 3.57平方キロメートル。
 - 3 弘化尋常小学校、連島国民学校…現在の倉敷市立連島南小学校。
 - 4 ワラジ…稲わらで作られたはきもの。
 - 5 出征…軍隊に加わって戦地に行くこと。
 - 6 勤労奉仕…戦時中に学生などに課された無償の労働。
 - 7 艦載機…軍艦に搭載された航空機。
 - 8 水島の航空機製作所…三菱重工業水島航空機製作所。
 - 9 防空壕…空からの敵の攻撃に備えて地中に作った穴。
 - 10 高射砲…敵の戦闘機を撃墜するために地上に設置された火砲。
 - 11 半鐘台…火災などの報知のために設けられた見張り台。
 - 12 代用食…主食、特に米の代わりにする食品。芋類・麺類など。
 - 13 スイトン…小麦粉を水でこね、適当な大きさにちぎって、汁に入れて煮込んだもの。
 - 14 玉音放送…1945年8月15日正午、昭和天皇みずからの声で、ラジオを通じて全国民に戦争終結の詔書を放送したものの。
 - 15 西ノ浦の国民学校…現在の倉敷市立連島西浦小学校。1947年の学制改革により、現在の小学校6年、中学校3年の制度になる前は、国民学校初等科6年、国民学校高等科2年の制度であった。
 - 16 玉島女学校…県立玉島女学校。現在の岡山県立玉島高等学校。

水島空襲

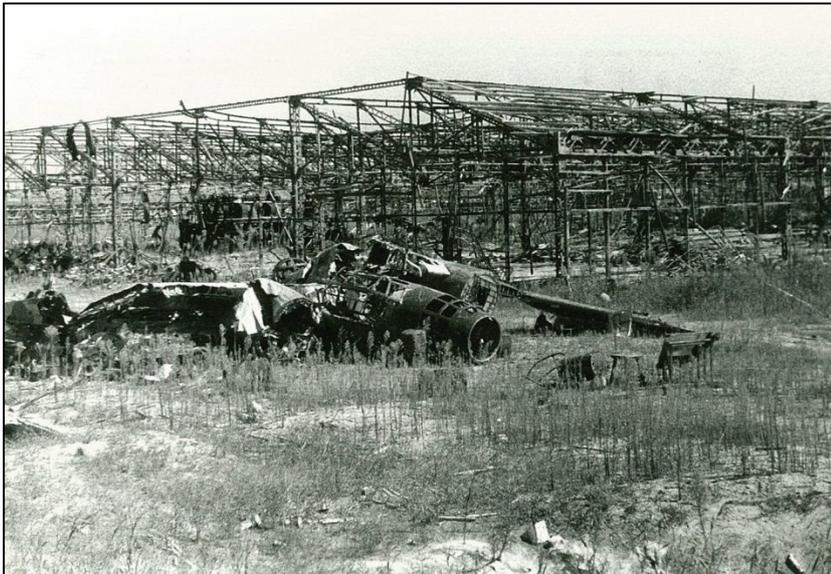
千 田 晃 さん

私は昭和20年6月22日の水島空襲の日に、三菱重工業の敷地内^{びし}にいて身をもって爆撃を受け、その時の実感が薄れて行く記憶を一生懸命思い出しながら、戦争を知らない後世の人に伝える使命があるのではないかと思い、記すこととしました。

前は呼松に有った⁽¹⁾第三福田尋常高等小学校6年生を終了し、松竹梅の福田⁽²⁾青年学校の内に併設されていた水島建築工養成所に入所し、他市町村から集まった同窓生と、学業及び⁽³⁾軍事教練にと教育を受けていました。本来の実習は中々であったが、軍の仕事が大部分で、色々な所に行って、技術だけは身に付けていました。そうしている時、2回目の空襲ではなかったかと思うが、水島の社宅の中で仕事をしていて逃げる時に、^{のこぎり}鋸を持っている同僚にぶつかり、胸に10センチくらいの傷が出来ました。今はもう見えないくらいになっています。

そんな日々を過ごしていた時、水島の工場敷地内での仕事が生まれ、先生、同僚共々、軍の仕事をし、昼食の時などには、近くにあった故障した攻撃機の機内で食事をしたものです。操縦席の前面は計器でいっぱい、胴体の内部は水色で配線も複雑、機銃が3ヶ所にあった様な記憶があります。仕事場は三菱の工場群^{びし}と滑走路の間だったので、当日の朝そこに行った矢先、あの空襲に遭遇しました。⁽⁴⁾警戒警報のサイレンが鳴り響き、ウロウロしているうちに空襲警報となり、⁽⁵⁾B29の爆音が東方から聞こえて来ました。広江の上空を見るとB29の編隊が見えたので慌てて近くに^{ごう}あった防空壕に急いで入り、B29の近づいてくるのを見ていると、機体の下に点々と黒いものが落ちて来ています。「あっ、爆弾だ。」と思い防空壕^{ごう}に伏せて目・耳・鼻を押さえていると、やがて「ヒューヒュー」、「ウゴー」と音が大きくなったかと思った瞬間、「ドンドン、ドンドン」と、その音と響きは凄まじいものでした。もうこれで死んでしまうのかと、脳裏を一瞬かすめました。そうこうしているうちに次の編隊が来ています。早く逃げなくて

はと思いながら、トロッコ棧橋のある方へと防空壕^{ごう}を移動して行きました。2～3回目の爆撃の合間を見ては、ようやくトロッコ棧橋にたどり着きました。真ん中を過ぎた頃、次の編隊が来ていたので、慌てて土手まで渡りきると同時に、押してきた自転車を横倒しにして土手を転がり落ちて身を伏せました。あの恐ろしい轟音^{ごうおん}を聞いた後、もうこれで大丈夫だと思って土手の上に這^はい上がり、そこで見たものは、先ほどわたって来たトロッコ棧橋の姿はもの見事に無くなっているばかりか、三菱重工^{びし}の工場群は壊滅状態でした。私たちは、九死に一生を得たと思いつつ、同僚何人であったかは思い出せませんが、兎^とに角^{かく}王島山まで逃げるのが精一杯でした。その後は山の麓で腰を下ろして、次から次へと来るB29の爆撃の様子をただただ見つめるばかりでした。中畝に有った



【一式陸上攻撃機の残骸】

高射砲陣地から対空射撃はしているものの、B29は編隊も崩さず悠々と西方に去って行きました。その時の機数は百数十機だと思っていたと思います。爆撃も終わり、早く家に帰らなければと、同僚共々それぞれの我が家へと向いました。私の家は広江だったので

帰る途中東塚まで来ると、道路とその周辺に大きな爆弾の穴が開いていました。穴は5～6ヶ所、直径10～15m、深さ2～3m位だったと記憶していますが、もっと多かったかもしれません。その近辺に、手が足かは不明ですがちぎれている人に、ムシ口⁽⁶⁾を掛けていた現場が今でも脳裏に浮かんできます。兎^とに角^{かく}悲惨な姿でした。また農家が何軒も壊れている中で、道路の南側の角地にあった家は、屋根瓦は吹き飛ばされ壁は撃ち抜かれている状態で、本当に気の毒でした。色々なことを体験し、身も心も高ぶるまま、我が家へ自転車に乗って無事帰宅した時の事、もう死んだものだと思っていた矢先のこ

とであったから、父母はもちろん家族全員で泣いて喜んでくれました。それも、長男の実は陸軍兵として福井県の部隊へ、次男の剛一は鹿児島鹿屋海軍航空隊の⁽⁷⁾乙種飛行予科練習生に、三男の真治は松山海軍航空隊甲種飛行予科練習生として入隊しており、男兄弟4人のうち3人が軍人になっており、身の保障も無い時、死んだと思っていた私が無事帰宅したものだからだと、今ではそう思っています。そして幾日か過ぎた日、記憶は定かではないが多分8月頃であったと思っています。広島と長崎へ新型爆弾が投下され、その名もピカドンと呼ばれていました。その理由は、空中で1個の爆弾が炸裂した時に、ピカッと光りドンと大きな音がした瞬間、市の大部分が高熱と爆風のため壊滅状態になったとのことでもあります。これが原子爆弾でした。

その日から幾日か過ぎ、倉敷の浅原の山中で海軍施設部の仕事をしていた時に、今日は重大なラジオ放送があるとの事だったので、ちょうど時間が来たから全員仕事を中止し、ラジオの前に集合しました。はっきりとは聞き取れない声の御言葉ではあったが、それが日本の⁽⁸⁾無条件降伏の敗戦の日であり、現在の終戦記念日であります。

-
- 1 第三福田尋常高等小学校...現在の倉敷市立第三福田小学校
 - 2 青年学校...尋常小学校(のちに国民学校初等科)6年を卒業した後、中等教育学校に進学せずに勤労に従事する青少年に対して社会教育を行っていた。
 - 3 軍事教練...1925年以降、中学校以上の生徒・学生を対象に行われた現役陸軍将校による軍事に関する訓練。1945年に廃止。
 - 4 警戒警報...警戒を必要とする知らせ。特に、戦時下で、敵機の空襲のおそれがある場合などに出される。
 - 5 B29...アメリカ合衆国のボーイングが設計・製造した大型爆撃機。
 - 6 ムシロ...ワラや竹などで編んだ敷物。
 - 7 乙種飛行予科訓練生...大日本帝国海軍における航空兵養成制度の一つ。旧制中学4年1学期修了者(甲種)と高等小学校卒業者(乙種)による志願制だった。
 - 8 無条件降伏...軍隊または艦隊が兵員・武器一切を挙げて条件を付することなく敵の権力にゆだねること。

私のトラウマ “ 防空壕^{ごう}から見た空爆 ”

大 條 一 郎 さん

毎年、今頃になると思い出す。それは昭和20年の夏、6月22日の朝のことであった。

その日も朝からセミの鳴き声がうるさく、うだるように暑い日であった。不思議と青く晴れ渡った空に突然、「ブーン、ブーン」というエンジン音がかすかに聞こえて来ると同時に空襲警報が鳴り出した。その日、農作業の動員を休んで家にいた私は、またか？と思いながら防空頭巾⁽¹⁾をかぶり、素足にゲタをつっかけて100メートルほど離れた山肌^{ごう}に造った防空壕^{ごう}へと走った。壕^{ごう}にたどり着くと同時に「ドーン、ドーン」と腹にひびく爆風に震え上がったのを覚えている。

大人の会話から「水島工業地帯（当時軍用機を製造していた三菱^{びし}重工業水島航空機製作所 = 現三菱自動車水島製作所^{びし}）」が爆撃されているということが理解できた。私は湿った薄暗い壕^{ごう}の中ほどから、恐る恐る入口へ出て空を見上げてみると、水島方面の空には無数のB29爆撃機（100機以上と聞いている）が、整然と編隊を組んで爆弾の雨を降らせながら飛んでいる。そこには、日本の飛行機は1機も現れず、飛んでいるのはB29爆撃機と護衛⁽²⁾のグラマン戦闘機のみである。グラマン戦闘機にいたっては、のどかな田舎の集落まで飛んで来て、しかも超低空飛行で私たちの頭上を飛び回り、手を振っているように見えた。それは私にとっては、とても恐ろしい、そして悔しく悲しい光景であった。今、思い出してもゾッとする。我が頭上は敵機のみとは。

一方、高射砲陣地からの砲弾は音だけはしているが、敵機には全然届かず、遥か^{はる}下方でパンパンとはじけて落下して来ている。その様子を見て、目の良くない年配のおばあさんは、高射砲の弾が敵機に命中し敵機がバラバラになって落ちて来ていると思い「勝った、勝った」と手を叩^{たた}いて喜んでいる。その姿が自分にはとても悲しく涙が止まらなかったのを覚えている（なぜならば落ちて来ているのはB29爆撃機からの爆弾だけ

ら)。本当に悔しく悲しい一日であった。

“鬼畜米英” “撃ちてし止まん” “欲しがりません勝つまでは” 等々の精神論と竹やり⁽³⁾では戦争にならない。この日も水島工業地帯では、学徒動員⁽⁴⁾を含めた多勢の方々が亡くなられたと聞いている。

この空爆で亡くなられた方々の御冥福を祈って筆を置く。



【学徒動員】

-
- 1 防空頭巾...空襲の際に落下物から頭や首筋を守るためにかぶった綿入れの頭巾。
 - 2 グラマン...アメリカの航空機メーカー。
 - 3 竹やり...竹を適当な長さに切った上で、先端部を斜めに切断した、あるいは その円周の一部だけを尖らせたもので、更に火で炙るなどして硬化処理を施した簡易の 武器。
 - 4 学徒動員...1938 年頃から国内の労働力不足を補うために、学生・生徒を軍需工場などで強制的に労働させたこと。

昭和20年・水島大空襲と艦載機の空襲

大橋 一夫 さん

今年・戦後70年の大きな節目。私自身も79歳を迎え、当時の記憶を辿れば小学3年・9歳の私の体験は現実と思えぬ強烈なものでした。

「何故、戦争になったのか」

幾度も語り合う機会を持ちましたが、先輩・友人の中に鬼籍(1)に入られる方もあり、寂しい限りです。

これを機に歴史認識を深め、自分史の一部として語り継いでいきたいと思います。

(1) 水島大空襲と北畝着弾

昭和20年、戦況は益々厳しく3月の東京空襲に始まり、標的が地方都市に及ぶようになりました。

ついに6月22日、水島大空襲を体験。当日は農繁期(2)で学校は休み、三菱も定休日。当時、北畝の畑ではサトウ木と麦の作付けが多く、この日は上天気。早朝から隣近所の協同で刈入れ作業、子供の私も手伝っていました。

作業が始まって間もなく、警戒と空襲のサイレンが続いて鳴り響き、最初は“またか”という軽い気持ちでした。

ところが爆音の凄さに今回はどうも違うと両親の話し合う声。ひとまず農作業は一旦中止となりました。

私の家でも、生家裏の防空壕ごうに老いた祖母を背負い、家族9人が避難した。外ではゴーゴーという飛行機の爆音が続き、加えて腹に響く重々しい音。父が、「どうも三菱工場方面に爆弾が落ちて大変になっているらしい。」と報告してくれた。好奇心旺盛な三兄と私は両親の制止を振り切り、銀杏の大木いちように10m程登った。南西約2km程先の三菱工場群が炎と黒煙に包まれ、薄汚れた上空には団子状の黒煙が点々と浮いて、今まで

見たこともない光景が広がっていました。広江上空から爆音が続き、目を転じると、10機程の編隊が三菱^{びし}上空に進むと機体の下から爆弾が落ちながらヒュー、ゴー、ドーンと空気を裂く音がして着弾する。各機が同じ行動をするので舞い上がる火柱と広がる黒煙で凄まじい様が続いていく。

これを受けて、地上の各所から高射砲が反撃するが、残念ながら高所の爆撃機まで届かず、編隊の下で破裂して黒煙が散る。後日、米軍の記録には、総数110機程が約1時間の爆撃とあり、水島大空襲でありました。爆撃終了でほっと一息つくと、今度は最前と異なる南西方面から低空で爆撃機が2機、私達の木に向かって来るではないか。一瞬、私達が標的と錯覚、木から下りて生家まで逃げ帰った時、地響きと爆風の衝撃で2人共、数メートル、ハネ飛ばされた。何が起きたのかわからず、見れば生家の玄関障子が押し倒され、棧がバラバラに折れていました。

のちほど、500m程先の畑に落ちた3発の爆弾のためだとわかり、もう少し近ければと思い、ゾットする体験でした。

幸いに死者は無く、近辺の家屋被害のみでしたが爆弾片が数年、田畑から掘り出され、記念に保管している方もおられます。後にこれが呉工場地帯を爆撃のあと2機が飛来して中畝高射砲陣地を狙ったのが外れ、着弾したものとわかりました。

終戦後、水島港近辺は子供の遊び場ともなり、友達と度々、空襲跡を見に行きました。

鉄骨が折れ曲がり、むき出しになった建物、ガラス片が散乱し無数に空いた大きな穴、滑走路には飛行機の残骸、広い工場の^{はいきよ}廃墟に言葉を失う。港東岸の田畑にも無数の爆弾跡、岸壁には不発弾が突き刺さって放置されていました。

(2) 艦載機の空襲

戦時体験で一番恐怖に感じたのは、昭和20年7月の四国沖空母⁽³⁾から発進した何機もの艦載機による空襲でした。記録によれば22日、24日の2回、三菱工場^{びし}関連施設と社宅、農家を襲撃した様子を今でも鮮明に思い出します。両日、学校は夏休み中、空襲警報で^{ごう}壕に避難した。時折り、顔を出しては状況を見て戦闘機の空襲であることが判り

ました。特徴あるグラマン戦闘機が縦列で編隊⁽⁴⁾を組み、飛行士の顔が見える程の超低空で南から機銃掃射⁽⁵⁾をしながら北方面に飛び去っていきます。反転して南に戻りながら何度もこれを繰り返す。壕^{ごう}に入っている弾がブスブス地面に刺さる音が伝わり、まるで間近で襲われている様で薄気味悪く怖い。敵機を迎え撃つ飛行機はこちらには無く、地上から高射砲で反撃するが、スピードに照準が合わないのか後々で破裂して当たらない。子供心にも誠に悔しく、はがゆい思いをしました。

後日、戦闘機に追われて逃げた経験を語る人、雨漏りで屋根の被弾が判ったと語る人、機銃掃射で負傷した人、臨海水島駅⁽⁶⁾では爆弾で屋根がめくり上がっている風景もありました。

年を重ねて今思えば、戦争とは、非情で、戦闘員である無しを問わず、銃口を向けられ命を遣り取りすることもあったと痛感します。

戦後70年も経ち、環境も世代も変わり、戦時の惨事を思い出させるものは今は無いが、銃後の戦争立会人の1人として、歴史認識を新たに持ち、語り継いでいきます。

-
- 1 鬼籍に入る...亡くなること。
 - 2 農繁期...田植えや収穫などで、特に農作業の忙しい時期。
 - 3 空母...飛行甲板を持ち、航空機運用能力を持つ艦船のことを言う。
 - 4 編隊...2機以上の航空機が一定の間隔、隊形を保持していること。また、その隊形。
 - 5 機銃掃射...機関銃で敵をなぎ払うように射撃すること。
 - 6 臨海水島駅...水島臨海鉄道の水島駅。

「少年の記憶」太平洋戦争と水島の戦場

三宅啓介さん

私は昭和9年2月生まれ、81歳になる。昭和15年連島西浦尋常小学校へ入学した。時に⁽¹⁾紀元二千六百年、国の一大行事として各地日の丸を掲げ⁽²⁾提灯行列で盛り上がっていた。

翌16年、2年生に進級。小学校は国民学校へ改名。日中戦争（当時は支那事変）中とはいえ、対米英戦争への足音は子ども心に感ずるものはあった。二学期の終わりに近く、12月8日を迎える。朝近所の人々が集まり「万歳」「万歳」と大歓声を上げ、ラジオは「⁽³⁾軍艦マーチ」と共に⁽⁴⁾大本営発表が鳴り響いていた。帝国海軍⁽⁵⁾真珠湾攻撃の報である。

年は変り翌17年、シンガポール陥落など日本軍の連勝連勝の報に一億国民老若男女胸を躍らせてラジオのニュースに聞き入った。戦後知ったものの、同年ミッドウェー海戦においては日本は大敗北を喫したにもかかわらず、大本営は勝利のみを報道し国民を鼓舞させていたのである。

国民学校においては毎月8日を⁽⁶⁾大詔奉戴日とし、全生徒は主神様に参拝、校長は開戦の⁽⁷⁾勅語を朗読、全員戦勝を祈願した。

時は少し前に戻り、亀島山の南の海を埋め立て三菱重工業が飛行機工場の建設を始めた。また、北側の田畑では工場で働く社員住宅の整地も始まり、住宅、商店と続々と出来上がっていった。

水島という地名は約4キロ先に浮かぶ小島、上水島と下水島の名前から命名されたものである。工場も完成し19年2月11日の紀元節（建国記念日）、海軍一式陸上攻撃機が完成。その初飛行の式典に小学生は全員日の丸の小旗を持って参加した。初めて見る⁽⁸⁾双発の4枚プロペラ、濃い緑色に塗装された機体、その勇姿を見て⁽⁹⁾血湧き肉躍った思いを覚えている。長い式典が終り初飛行は成功。上空を旋回後、東の空へ翼を左右に振

って消えて行った。名古屋で武装し戦地へ行くとの説明に目を輝かせて聞いたものである。三菱の飛行機工場完成間近、連島の籠取山に海軍一個中隊が赴任。兵舎を建て高射砲陣地を築き5門の高射砲が南の空を向き水島の防衛にあたった。前に述べたラジオの



【第1号機の進空式】

「軍艦マーチ」はほとんど聞かれなくなり、19年秋には神風特別攻撃隊、20年にかけてはサイパン等の玉砕で、それは「海ゆかば」⁽¹²⁾に変わっていった。それまでB29の空襲は成都⁽¹³⁾(中国)より飛来し、主に北九州工業地帯を目標にしていたが、サイパン、テニアン島を基地としてB29の日本本土爆撃が始まる。3月の東京大空襲、そして大阪、神戸と主要都市は次々と焼夷弾の雨にさらされていった。ある晴れた日、1機のB29が超高空より銀色に輝きながら飛行機雲を引き、ゆっくりと水島上空を1周した。それに前後して、3月に何の警報も無く高空よりB29が数発の爆弾を三菱の工場に投下した。5年生末期の授業中でもあり、窓から見た爆発音と噴煙は物凄く、これが水島が戦場になる前触れでもあった。6月22日は朝8時過ぎ突然の空襲警報。空を見上げれば空一面と言っても過言ではないB29の編隊。今まで見たことも無い低空、銀色に見えた機体も黒く見え、それは数えきれない大編隊であった。同時に籠取山の高射砲も火をふいた。上空での砲弾の炸裂音、破片が屋根の上に落ちてくる。同時に夕立にも似た爆弾の落下音、続いての爆発音、地震の様な振動と爆風、防空壕に入っているものの初めて知る恐怖、時間で言えば1時間足らずで静寂が訪れる。家族の制止を振り切り裏山へ駆け上がる。籠取山全体が黒煙に包まれ、後ろの三菱の工場は火の海、立ち昇る黒煙は何千mも高く、空一面を覆っていた。

しばらくして雨が降ってきた。あの黒煙が雨を招いたものと思う。後日、岡山市への空襲。夜間のため焼夷弾が空中で炸裂、小さな火の玉の落下して行く様子は連島でも見

ることができた。次にやってきたのは、グラマンの来襲である。地上で動く物に狙いを定め機銃を打ちまくる様子は、正に地獄であった。1機のグラマンに⁽¹⁵⁾対空砲火が命中。白い煙を引いて南の空に消えて行った時の喜びは大変なものであった。日々グラマンの来襲に怯えながら8月6日には広島が1発の爆弾で消滅したとの報は特殊爆弾と報じられ、強い光線を出すため白い衣服をとの指示があり、9日には長崎と続き、8月15日を迎える。「本日正午、天皇陛下が重大な放送をされる。」との報があり、正午ラジオの前に立ったものの、雑音が激しく聞き取る事はできず、その日の夕刻になり日本の敗戦を知った。日本が敗けた悔しさは不思議と無く、一番に心の中を走ったことは「これで空襲が無くなる」そのことのみであった。水島の戦場はここで終わりを告げる。

6年生も2学期が始まる。あの⁽¹⁶⁾軍国主義教育はかけらも無く、教科書のページは次々と黒く塗り潰し、その作業のみに追われていった。あの軍国主義から民主主義への変わり身の早さは正に驚きで、日本人の体質か今もって不思議な思いがするのは、私だけだろうか。

最後に、水島の戦場も含め、あの⁽¹⁷⁾戦禍に倒れた三百余万の⁽¹⁸⁾御霊に心から哀悼の意を表します。

-
- 1 紀元二千六百年...1940年が神武天皇の即位から2600年目に当たるとされたことから、式典などの記念行事が行われた。
 - 2 提灯行列...祝意を表すため、夜間、大勢の人が提灯をもち列を組んでねり歩くこと。
 - 3 軍艦マーチ...鳥山啓作詞、瀬戸口藤吉作曲の軍歌。
 - 4 大本営発表...太平洋戦争(大東亜戦争)において、日本軍の最高統帥機関であった大本営が行った、戦況などに関する公式発表のこと。
 - 5 真珠湾攻撃...ハワイ・オアフ島の真珠湾(パール・ハーバー)にあったアメリカ海軍の太平洋艦隊と基地に対して日本海軍が行った攻撃。
 - 6 大詔奉戴日...太平洋戦争完遂のための大政翼賛の一環として、昭和17年から終戦まで実施された国民運動。太平洋戦争開戦の日になんで、毎月8日に設定された。
 - 7 勅語...天皇のことば。
 - 8 双発...エンジンが2個あること。
 - 9 血湧き肉躍る...勇ましくて興奮させられる。
 - 10 神風特別攻撃隊...太平洋戦争末期、追いつめられた大日本帝国海軍が編成した特別攻撃隊。
機体に爆弾を固定した航空機による敵艦船への体当たり攻撃を行った。

- 11 玉砕...玉のように砕けること。太平洋戦争における日本軍部隊の全滅を表現する言葉として大本営発表などで用いられた。
- 12 海ゆかば...万葉の歌人，大伴家持の長歌の一節に信時潔が曲を付けた軍歌。
- 13 成都...中国四川省の省都。戦時中は B29 による日本本土空襲の基地となった。
- 14 焼夷弾...火災を引き起こすために作られた爆弾。
- 15 対空砲火...航空機に対して行われる，火砲による攻撃。
- 16 軍国主義...戦争を外交の主たる手段と考え，軍事力を最優先する考え方のイデオロギー。
- 17 戦禍...戦争による被害・災難。
- 18 御霊...魂（たましい）の尊敬語。

「水島空襲の真実 ガラガラ音」

吉田敬治さん

今から70年前、太平洋戦争終結の年の水島空襲の惨状⁽¹⁾について、その真実を語りたいと思います。私は当時、三菱重工業水島航空機製作所に勤務していました。ここは、毎日、一万数千人の人が働いている、一式陸上攻撃機を製造する大きな工場でした。攻撃機の胴体を製造する第二組立工場では二千人以上が働き、そこが私の職場でした。

水島空襲の前日、昭和20年6月21日夕刻、連島町笹取神社の近くにあった旅館で、工場長主催の懇親会が開かれ、役職者や技術者、約30人が参加して、厳しい戦争中とはいえ、楽しいひと時を過ごしました。宿直のため、その晩は同僚のK君と2人で宿直室に就寝しました。

翌朝午前7時頃に起床して、自分一人で、工場内外を巡回しました。内外ともに静寂そのものでした。雲が少し浮かんでいましたが、晴天でした。しかし、事態は急変しました。

午前8時25分頃、宿直室に帰ると、K君から「ラジオ放送で岡山県南部に空襲警報が発令されている」と教えられました。直後、第二報で「敵機は播磨灘上空を西進中」との放送を聞き、慌てて、建物の北側の屋外に出て上空を見上げると、敵機はまだ見えず、青空の中を綿の様な白い雲が、亀島山上空から水島灘^{なだ}に向かって浮流していました。足は自然に北の方に向い、約10分後、気がつくと北の端、海軍部隊兵舎の東側付近の防空壕が点在する付近に到着していました。

東の空を見上げながら、土の中に造られた防空壕^{ごう}に避難しました。深さは1.6m位、幅は1m位、長さは3m位でした。この様な防空壕^{ごう}が土の中に五か所造られていました。鉄骨ではなく、丸太の木組でした。上空は依然として、白い雲の流れる青空でした。

「午前8時50分頃、米軍機編隊第一陣がかすかな爆音を響かせながら水島駅東方上空に出現する」。芥子粒位の点々に見えました。高度は8,500mか9,000m位

だったと思います。直後ガラガラガラと金属音が響き渡り30秒から40秒位続きました。後はザーザーと、その音は、⁽⁴⁾番傘に夕立ちの大雨が降りそそぐ音のようでした。「ザーザー音に代わって、耳が圧迫される」。「その直後ドーン、ドーン、ドーンと⁽⁵⁾万雷の響きに似た爆発音が響き渡る」。防空壕の底で、^{ごう}今までに経験した事の無い、身震いする恐ろしさを体験しました。

B29爆撃機1機が500kg爆弾を10個運んで来たとしても、11機編隊で110個の爆弾を投下した事になります。爆弾を受けた時の強い衝撃は、あたかも雷が一度に100個以上落ちる衝撃に匹敵するように思いました。それぐらい、激しい空襲でした。

^{しばら}暫くして防空壕から出て、工場の方を眺めると製作所東北部の材料置場と機械工場方面から黒煙が立ち上っていて、南西の方向に向かって流れていました。

約10分経過した午前9時頃第二波の敵編隊11機が現れました。次第に機械工場、第一・第二・第三⁽⁶⁾板金工場と、西南へと爆撃目標が移動していきました。第六波攻撃で、私の職場・第二組立工場（胴体工場）は、無残にも爆撃されてしまいました。その後、七波攻撃から十波攻撃により、南の第一組立工場（総組立工場）、工場外に置かれた胴体部分、完成した飛行機等、数十機が破壊されました。

B29爆撃機は、種松山上空から水島駅上空に向かって一直線に飛来して、水島駅東側上空で爆弾を投下しました。空を見上げていると、爆弾を投下した11機編隊の爆撃機は機体が軽くなって、上空に浮き上がっていきました。そのまま編隊を変化させる事なく玉島方向に飛行を続けて行きました。



【一式陸上攻撃機の残骸（中央は銃座）】

午前10時頃、爆撃が終わったので10時50分頃から、K君と一緒に第二組立工場

に入って様子を見て回りました。工場東北部の屋根が広い範囲で破れ、鉄骨が曲がっているのが目に入ってきました。黒煙が立ち昇っている場所があるので近づいて見ると、攻撃機製造の図面である青写真が燃えており、火の付いた青写真、また灰になった青写真が、破壊された屋根の空間から空に舞い上がっていました。急いで^{ほうき}箒で火を叩いて消しました。火が消えたので、北東部の食堂に通じる扉を開けて外へ出ようとした時、間近でドカーンと⁽⁷⁾轟音がしたので恐る恐る扉を開けてみると、工場と食堂の中間に直径12～13m、深さ10m位の大穴ができていました。編隊を離れて遅れた1機が爆弾を投下したと想像しています。

以上が70年前の6月22日、三菱重工業水島航空機製作所空襲^{びし}の記憶です。22日の空襲に関して、製作所内での死傷者は皆無⁽⁸⁾と聞いて安堵⁽⁹⁾した記憶は、今でも鮮明に覚えています。

空襲で、大変に恐ろしい色々な音を聞きました。ガラガラ音は爆弾の先端部に装着された金属製の羽根車が回転して起爆⁽¹⁰⁾止めの安全装置を引抜く音です。未だに忘れることができない音になっています。

戦争は恐ろしい行為です。戦後70年が経ち、戦争体験をした人たちが少なくなってきました。戦争の悲惨さを後世に伝えることは重要です。90歳になった今、語り部として戦争の話を若い人たちに伝えていきたいと秘かに思っています。平和な日本、平和な世界であることを祈りながら。

-
- 1 惨状...思わず目をそむけたくくなるような、むごたらしいありさま。いたましいありさま。
 - 2 一式陸上攻撃機...第2次世界大戦中の日本海軍の主力中型爆撃機。一式陸攻と略称する。
 - 3 芥子粒...ケシの種子。きわめて小さいもののため。
 - 4 番傘...竹骨に紙を張り油をひいた、粗末な雨傘
 - 5 万雷...多くの雷。転じて大きな音の形容
 - 6 板金...金属の板に力を加えて変形させ、決められた形状・大きさの製品を作ること。
 - 7 轟音...大きく鳴り響く音。
 - 8 皆無...少しもないこと。何もないこと。
 - 9 安堵...気がかりなことが除かれ、安心すること。
 - 10 起爆...火薬に爆発反応を起こさせること。

三菱重工業水島航空機製作所 爆撃のことほか

金光秀直さん

私は今、83歳と高齢になり、戦後70年も経た今でもあの日のことははっきりと
脳裏(1)に焼き付いて離れない。

小学校6年から行く旧
制の県立倉敷工業学校1
年の初夏、1945年6
月22日、戦争はまさに
日々激しさを増し、学校
から勤労奉仕で小麦刈り
霞橋東岸下の岡崎神
社まで自転車の人、数十



【勤労奉仕作業】

人と行く。集合して点呼(2)を取り数人ずつ何組かに分かれて畑に100メートル位入りか
けると、警戒警報のサイレンが「ウーン、ウーン」と間をあけて鳴り出した。するとそ
の時、現在、鷺羽山道路がついている所のゴルフ場のある西の山の辺りより高射砲の
音がしかけ、B29の飛行機が見えだしたから、小麦の間に身を沈め耳や目を手でふさ
ぎ、平素から教わっていたように腕立て伏せをし、肘をついておると「ドカドカドカン」
と腹をえぐられるような、私の体めがけて爆弾が落ちてきた様な音がして、ふさいで
いた手が外れ、なおも「パン、パン」と音が止まない。首をあげると、船穂の宝満寺の辺
りより機関砲らしきものを打つ音がし、また玉島戸島神社辺りからもB29を目がけて
打っておった。やっと音がおさまったと思ってほっとしていると、まわりに人は1人も
いない。点呼をとった所の土手へ帰ると、友が一人いて二人で土手へ寝転んでいたら、
またB29が高さ7,000メートル程の上空を10機位が3機編隊でやってきて、前
回と同じ重工業の上だけに落とした。落とした瞬間は横向きで爆弾はバラバラ見えてい

たが、縦に向くと「ヒューヒュー、ゴウーゴウー」と音がして「ドカン、ドカン、ドーン」ともの凄い破裂音がした。亀島山の上と今の倉敷芸術科学大学の東の山の辺りでも高射砲があり撃つ。日本の高射砲の性能がアメリカには十分わかっていたのであろう。撃った弾は6,000メートル位の高さで破裂するので、撃っても撃っても届かないのだと後でわかった。10回前後来たうちで1回、高梁川^{はし}の河口のあたりを水島から玉島の方へ向かっている船(漁船の4~5倍)へ、機密な物を運んでいると思ったのか1回だけ爆弾を落とし、船は影も形もなくなっていた。空襲が済んでグラマン戦闘機が写真を撮ったのかぐるぐる回って帰った。弾の破片がバラバラ落ちているのもわからず、土手に終わりまでいた。

後日、友と船で沖より上がり爆撃地^{びし}三菱辺りまで行ったが、会社の建物は鉄骨が無残にも焼け残っていたのを見た。当時の現場をまざまざと見て、少年の心の一隅に戦争の恐ろしさを、生涯忘れえぬものとして残し続けてきた。

そして、その夏ついに終戦となった。

-
- 1 脳裏...頭の中。心の中。
 - 2 点呼...人員がそろっているかどうか調べること。

2 空襲体験

「人生の寄り道」より

松谷武夫さん

⁽¹⁾傘寿を迎え人生を振り返りながら、私の書いた本「人生の寄り道」の中から、神戸空襲を綴ったページを辿りたいと思います。

神戸空襲

昭和20年になりますと、戦局はさらに悪化、敗色が濃くなってきました。硫黄島の全滅の後、アメリカ爆撃機B29が日本本土へ空襲を激しくしてきました。初めは軍需工場のある工業地帯へ、3月に入って東京・大阪・神戸へと大都会の住宅地に、無差別の空襲を加え、各都市へと広がって行きました。

私は忘れもしない3月17日、深夜突然に警戒警報が鳴り、間もなく続いて空襲警報が発令となりました。神戸の街に敵機B29の襲来です。B29に向け山側と浜側双方からサーチライトを照らし高射砲で、上空では日本の戦闘機も応戦です。敵機は照明弾を手がかりに爆弾や焼夷弾を、雨あられの如く投下しながら通り過ぎて行きます。

両親や兄弟3人の家族は、我が家に隣接する大きな防空壕の中へ避難しました。やがて近くの住宅に火の手が上り、消火活動をしても次々と至る所から住宅が燃え、そして周囲全体が火の海となって行きました。この様子を見て危険を感じた父は、このまま防空壕にいると窒息死や焼死の危険があると判断して、学校に避難することになりま

【神戸空襲】

3月17日未明の大空襲により、兵庫区、林田区、葺合区を中心とする神戸市の西半分が壊滅、5月11日の空襲では、東灘区にあった航空機工場が目標とされ、爆弾による精密爆撃が行われました。この空襲では、灘区・東灘区が被害を受け、そして6月5日の空襲では、西は垂水区から東は西宮までの広範囲に爆撃され、それまでの空襲で残っていた神戸市の東半分が焦土と化しました。こうして、この3回の大空襲によってほぼ神戸市域は壊滅し、空襲による現在の神戸市域の被害は、戦災家屋数14万1,983戸、総戦災者数は、罹災者53万858人、死者7,491人、負傷者1万7,014人という大きな惨禍でした。

した。

防空壕^{ごう}を出て近くの学校に避難するとしても、これまた大変な命がけです。この時すでに周囲の家は燃え盛る火の海です。凄まじい熱風が吹き火の粉が舞い散る、その中を潜り抜けながら学校に向いました。頭にかぶっている⁽⁹⁾防空頭巾や衣服に飛んで来る火の粉を払いながら、燃える我が家の前を通り親子一緒に、やっとの思いで学校に避難しました。

避難した校舎で、両親は警戒したり兄弟は職員室に身を潜めていました。学校の建物は上から見てコの字型の鉄骨3階で木造2階建の別棟と廊下で接続し、その廊下はシャッターで閉ざされています。この当時は各教室の廊下に、大きな樽^{たる}を置き水も入れバケツも用意していました。そのシャッターの所から燃えさかる木造校舎の火が、鉄骨校舎の廊下に入り込むと一大事です。1階2階共大人は水を掛けて警戒したようです。

そのうち、木造校舎は燃えつき崩れてしまいました。戦時中でストーブは使用しなくても、壁に煙突の穴があり、そこから火の粉が舞い込んでカーテンを焦がす様です。別の所ではコンクリート壁面の外側で熱い炎が渦巻いたのか、その内側の木の床は一部が焦げていました。直接火が入らなくとも発火の恐れもあり、安心は出来ませんでした。

暗闇を赤く焦がし、長く燃え続けた大きな炎も収まりかけました。長く感じた深夜の悲劇は悪夢のようでした。やがて次第と東の空が明るくなり始めました。そしていつもの朝日が差し込んで来ます。周囲の街は驚くほど一変していました。これまでの多くの家が一晩で焼失してしまい、哀れ残酷なまで⁽¹⁰⁾変貌した焼野原でした。避難出来た学校が運よくポツンと残りました。山側は時々遊びに行った会下山⁽¹¹⁾が見え、浜側はこれまで見えなかった山陽本線の高架が見えます。⁽¹²⁾荒涼とした焼野原を、ぼんやりと見詰めていました。

10歳の少年の心に、全く想像を絶する恐ろしい生き地獄⁽¹³⁾を見た様な悲惨な光景は、今なお脳裏に焼き付いています。両親は苦難の中この先どう生活して行けるのか、茫然⁽¹⁴⁾自失^{じしつ}です。幸い中道国民学校のおかげで家族の生命が助かったのが救いでしょうか。

焼野原の我が家の跡は、全てが灰になり残された物はありません。ただ⁽¹⁵⁾供出用に集めていたアルミ貨幣は溶けた固まりになり、又ご飯を炊く釜の中は、お米が炭の様な焦げた固まりになっていました。

空襲の時、近所で死亡された人がいました。遠く離れた火葬場へと移送されました。犠牲者も多く処理しきれません。混乱の非常時だけに葬儀も出来ず、家族で処理して下さいとのことでした。仕方なく離れた所で茶毘⁽¹⁶⁾に付し、誠に哀しいお気の毒なことがありました。

こうして中道国民学校で1週間ほどローソクの灯りで寝泊まりしました。にぎり飯や缶詰など、伊丹^{いたみ}から送られた様です。簡単な診察もありました。空襲の煙の影響か、私は目の痛みと頭も少し痛く、ぼんやりしていました。又入浴は出来ず、肌着は無く着替えも出来ませんでした。

戦時中のことで戦災者への支援は余り無く、途方に暮れる日々でした。その為神戸を離れて、母の故郷倉敷へ行く事になりました。

終戦そして戦後の10年、両親は大変ご苦労をされました。私も長く苦難の少年時代・青年時代を過ごしました。あの当時を想い、過ぎ去りし日の記憶が甦^{よみがえ}って来ます。

-
- 1 傘寿...「傘」の略字の「伞」が「八十」と読めることから数え年の80歳。
 - 2 軍需工場...軍隊が必要とする武器類などを製造する工場。
 - 3 襲来...激しい勢いでおそいかかってくること。
 - 4 双方...両方。
 - 5 サーチライト...ランプに反射鏡やレンズを組み合わせて、ある限られた範囲をほぼ平行な光ビームで照らす装置。
 - 6 高射砲...飛行機を射撃するのに用いる中小口径砲。発射速度が速く射界が広い。もと陸軍での呼称で、海軍では高角砲といった。
 - 7 照明弾...夜間の戦闘で照明や信号に用いる弾丸。
 - 8 焼夷弾...焼夷剤と少量の炸薬^{さくやく}とを入れた砲弾または爆弾。油脂焼夷弾、エレクトロン焼夷弾、黄燐焼夷弾など。
 - 9 防空頭巾...太平洋戦争末期の日本で使われた、空襲の際に落下物から首筋や顔を守る頭巾。
 - 10 変貌...姿や様子などがすっかり変わること。
 - 11 会下山...兵庫県神戸市兵庫区会下山町にあり、長田区との区界隣接する標高80～85mの山。

- 12 荒涼...荒れ果ててものさびしいこと。
- 13 生き地獄...生きながら地獄にあるようなひどい苦しみにあうこと。また、そのありさま。
- 14 茫然自失...あっけにとられたり、あきれはてたりして我を忘れてしまうこと。
- 15 供出...政府などの要請に応じて食糧や物資などを差し出すこと。
- 16 荼毘に付す...亡くなった人を火葬すること。

東京空襲

大 山 陽 子 さ ん

今年は終戦から70年になります。戦争のこわさを思い出しつつ戦災にあった時のことを書いてみようと思いました。私は昭和6年11月東京の神田(昔は神田区でしたが今は千代田区です)に生まれました。昭和16年12月8日に大東亜戦争が始まったことをラジオから知らされました。母が町内からの知らせで、バケツに水をいっぱい入れて次々と渡して火災を消す訓練をしたりしていました。昭和18年、父が神田の家の玄関の隣りのところにありました二畳の部屋の畳をあげて、下の土を深く掘って小さな階段をはめまして防空壕ごうを作りました。昭和19年、母は妹2人(小1と2才)を連れて長野県松代に疎開(2)致しました。父は甥おいと一緒に小さなトラックで、自分の生れた家の近くで借りていた15畳の部屋に、私達の生れた町から写真や小さな家具を何回か運んでいました。

昭和20年2月25日の朝、雪が降っていたようでしたが、6時頃に空襲の音と共に祖母と父に起こされ防空頭巾をかぶり、

祖母と防空壕ごうにもぐりました。その前から敵の飛行機のB29の音のすごさと同時に、お向いの玄関のガラスの一枚戸がガラガラガラビシャとこわれた音がしました。その時、何回も爆弾の落ちる音、爆風の音や爆破の音と、ただただこわさでいっぱいでした。その上、家が時々くずれる様子があり、父が少し表に出ますと、少し先で燃えるのが見えました。この防空壕ごうでも危ないから逃げようということになりました。お隣さんにリヤカーがありまして、2軒で一緒に逃げるということになりました。ふとんとまくらを

【東京空襲】

東京は昭和19年11月14日以降に106回もの空襲を受けました。特に昭和20年3月10日、4月13日、4月15日、5月24日未明、5月25日-26日の5回は大規模でした。

その中でも、死者数が著しく多い昭和20年3月10日の空襲(下町空襲)は「東京大空襲」と呼ばれ、この空襲だけでも罹災者は100万人を超えました。

当時の警視庁の調査での、3月10日の被害数は以下の通りです

死亡：8万3793人
負傷者：4万918人
被災者：100万8005人
被災家屋：26万8358戸

のせ今思うと、御飯の入っていたお鉢もあったようでした。その時、雪と火花が頭の上をとんでいましたが、爆弾の音も聞こえました。とにかく三軒家を通りすぎて四ツ角に来て火事のようなようでしたが、無理矢理に中をくぐって行きました。今考えますとどの位かわかりませんが、祖母、父、私とお隣さん2人で神田駅を越して今の淡路町（神保町の本屋さんあたりより手前）の淡路公園に来ましたが、人、人でいっぱいでした。でも神田駅の私の住んでいたところと反対の方は、爆撃していませんでした。夕方空襲警報が解除になりまして、父が家を見てくると出て行きました。割合に早く帰りまして「10軒位先まで燃えているが家が大丈夫なようにすっかり鍵をかけてきた」と言って、私の教科書と逃げた時にも持って来ましたが、別の御飯の入っているお鉢を持って来ました。そのうちうす暗くなりました時、私達の名前を言っている声が聞こえました。淡路町で高級家具の店をしていた遠い親戚が迎えに来てくれたので3人で行きました。そして家に着き夜になりフカフカのおフトンに寝かして下さり、お家の方は座ぶとんにお休みしていらっしやいました。その時の有難さは今でも忘れられません。昨年思い切って淡路町まで行って見ましたが、あれからすっかり建物が変り、ビルばかりでわかりませんでした。翌々日、父は会社の宿直室、祖母と私は祖母の姉が世田谷にありましてお世話になりました。そこで3月9日の浅草の大空襲で真赤な空が見えました。翌日、祖母と2人で母のおります松代に参りました。松代では30分友達と歩いて行きますが2回ほど警報がある位で橋の下にかくれました。皆さんラジオが無く、近くの温泉で8月15日のラジオを聞きましたがよくわかりませんで、アメリカの人が来るかもとか、外に出てはいけないとか言われました。今考えてみますと、神田で空襲の前食べるものが無く、御飯といいましてもキビでした。うどん粉ではなくワラのような物とか、おいものくきとか、時折り父が母の着物を持ち私を連れて農家まで行って、おいもと替えてもらったことを思い出します。たまにラジオで「何班すけそうだら」という声ばかり聞こえていました。私たちは松代で御飯をいただきましたが、東京におりました父は毎日食事に苦労したそうです。今思いますと、肉もほとんど食べなかった私など、今でもとても

健康です。今の若い方の食事は和食が少ないように考えられます。

私は終戦の翌年昭和21年4月から東京の元の女学校(昔は6年生から入学しますが女学校でした)に戻りました。淡路町の親戚から学校に行ってましたが、弁当を持って来られない方もいて、土日月火と休みで私も月1回は松代に帰りました。汽車が混んで何回連結にぶらさがったかわからず、トンネルになりますと奥の方からだんだんとおされました。帰りは何回も荷物検査があり、教科書も放り出されましたことを思い出しました。

戦争はいやです。平和な日本であることを祈っております。

-
- 1 大東亜戦争...太平洋戦争をいう当時の日本側での呼称。
 - 2 疎開...空襲の被害を避けるために、一箇所に集中する施設や人員などを分散させること。

岡山空襲

齋藤典子さん

こちらの作文は、齋藤さんの御家族が小学4年生の時に経験した岡山空襲について、小学5年生の時に作文したものです。

昭和20年6月29日午前2時40分。B29, 70機を持って岡山市を爆撃しました。ぼくが寝ていると、お母さんが「まあちゃん、まあちゃん」といわれたので、目がさめました。「おちついて服を着なさい、空しゅうですよ。」とお母さんがおっしゃいました。ぼくはかやから出て、服を着て、防空の用意をしました。すると、ざざざざーどどどどどどんと、すさまじい音がして電気が消えました。お母さんは黒い紙のまくを二重におはりになり、ローソクに火をおつけになり、まどガラスを全部お開けになりました。ぼくはリュックサックをおいしました。お母さんもおわれました。ぼくはくつをはき、お母さんと2人で外へ出ました。7, 8人川のへりにいました。ぼくらは橋を渡って行

【岡山空襲】

昭和20年6月29日、岡山市街地はアメリカ軍による大規模な空襲を受けました。

ティニアン島を飛び立ったB29の最初の1機が岡山市上空にあらわれたのが午前2時43分。それから午前4時7分までの1時間24分にわたって、138機のB29により約883トンの焼夷弾が投下されました。

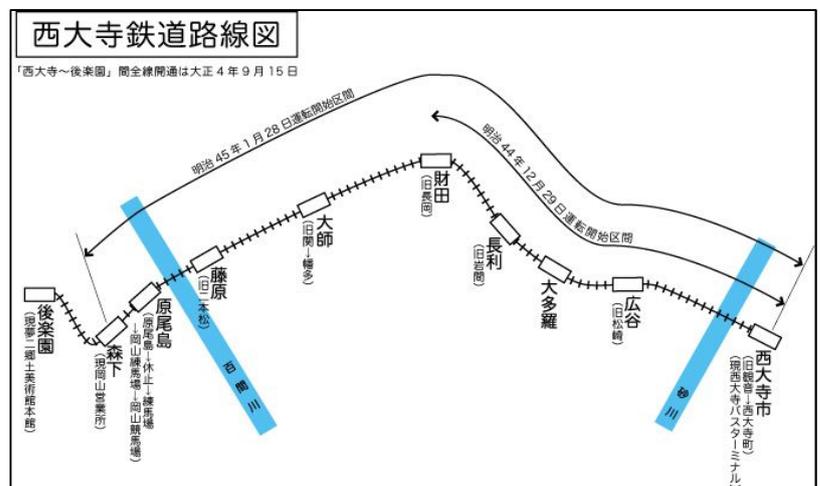
この空襲で当時の市街地の約63%が焦土と化し、少なくとも1,737人以上の犠牲者が出ました。

犠牲者については2,000人を超えるという説もあります。

きました。橋には焼夷弾しょういだんのひらけたのがもえていました。お母さんが「おそれずふみこえて行きなさい。」とおっしゃいました。初めはこわかったが、お母さんと2人で火の中をむちゅうで走りました。ほうらい橋のこちらにトラックが止めてありました。ほうらい橋を過ぎて一女のへん(1)を通った時、ほうらい橋へ焼夷弾しょういだんが落ちました。僕らの近くにも落ちました。ふとんをかぶりながらぼくはけい馬場の方へ行きました。途中ぼくらに「私もつれにして下さい。」と、よそのおばさんがおっしゃったのでつれにしてあげ

ました。そのおばさんはふるえておられました。それから百間河原の土手へあがって見ると、お城の近くがもえていました。おかあさんが「岡山城もこれが見おさめになるかも知れないから、よくよく見ておきなさい。」とおっしゃいましたので、土手でしばらく休み、岡山市の方をながめました。ふと気がついたら僕らの学校ももえ上っています。あのなつかしい金わが3つ、はっきりと火の中に浮び上って見えます。「お母さん、⁽²⁾弘西が焼けています。」と思わず泣き声になりました。お母さんは「まだはっきりとはわからないのだから。」と元気づけて下さったが、ぼくはひとりでに涙が流れました。百間河原に来るまでに、^{しょういだん}焼夷弾が目の前やちょっとうしろに5、6回落ちて来ました。その度に夏のふとんをお母さんといっしょにかぶって、たんぼの中や道ばたにふせました。ぼくも夏ぶとんを防弾帽の上からかぶっていましたが、一女の前で気がついて見たら、防弾帽2枚だけかぶって、夏ぶとんはいつのまにか落ちていました。橋の上で大勢おしあった時に落ちたのでしょう。百間河原の土手からたんぼを通りました。この時、雨が

降って来ました。たんぼの細道を通って行くと、5、6人たんぼのよこへかがんでいました。たんぼをぬけて、⁽³⁾藤原駅の方からせんろをつたって行きました。⁽³⁾大しの駅まで来ると8、9人いて「ここへこられ、ここへこら



れ。」といったので行きました。雨がだいぶやんだので、また東へ東へと行きました。⁽³⁾財田の駅から雨がやみました。ぼくらは、⁽⁴⁾たわをこしてしゅくおくのおばさんの家へ行って、ごはんをよばれて、お母さんはまた岡山へかえり、ぼくは⁽⁵⁾笹岡まで⁽⁶⁾しゅくおくのおばさんがつれて行って下さいました。笹岡のおじいさんもお父さんも大変しんぱいして、ぼくたちの来るのを今か今かと待っておられました。晩にはお母さんも来られました。また近所へ岡山からたくさん来られました。笹岡の人は、ふとんの荷物を作ったり、

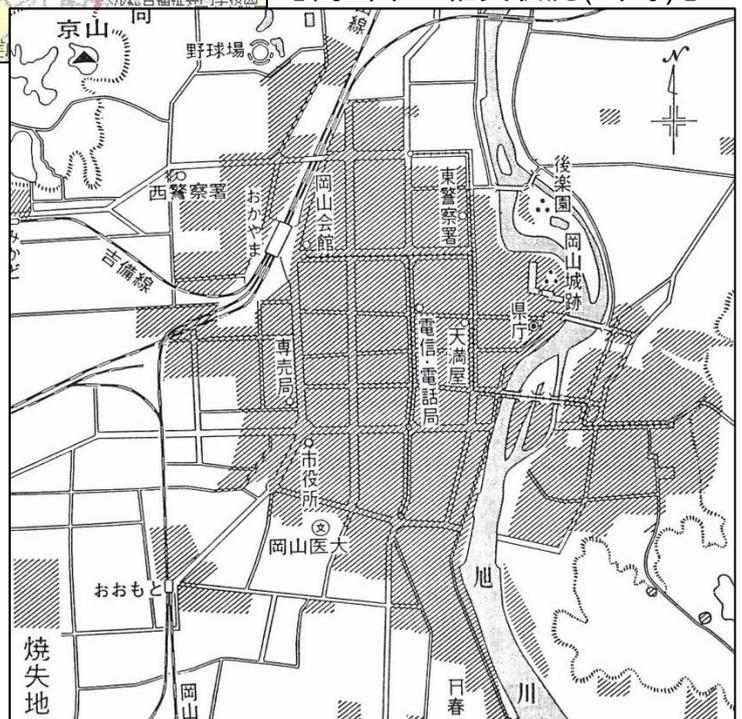
おにぎりをたくさんこしらえて、岡山まで持って行かれました。

- 1 一女...岡山県第一岡山高等女学校（現岡山県立操山高等学校）。
- 2 弘西...岡山市立弘西国民学校（現在廃校）。
- 3 藤原,たい師,財田...旧西大寺鉄道の駅名
- 4 たわ...峠。山の尾根の低くくぼんだ所。
- 5 笹岡...現在の「岡山県岡山市東区瀬戸町笹岡」。
- 6 しゅくおく...現在の「岡山県岡山市東区瀬戸町宿奥」。

【現在の岡山市街地】



【岡山市の罹災状況(当時)】



戦争体験

大坪和子さん

昭和19年3月10日、呉の上空にどこからともなく敵の飛行機が低空で親子焼夷弾⁽¹⁾を投下。敵機は編隊を増やし、次から次へと爆弾を投下して行きます。夜ともなれば灯火管制になり、外へ灯りが漏れないように豆球を黒い布で囲み、「救急袋」⁽²⁾と水筒を肩にかけ、一日中肩から離すことが出来ません。救急袋の中には、焼米⁽³⁾が一握りと乾パン⁽⁴⁾が入っているだけです。当時、私は小学6年生で母にまわりつくだけの子供です。空襲警報が発令になると爆音と共に爆弾が「ヒューン」「バリバリ」「ドン」と落とされ、逃げるのが一生懸命です。怖い恐ろしい毎日でした。昭和20年7月2日未明、敵機B29、80機の編隊により呉は大空襲を受けました。火の手は盛んになり、みるみる火の海となって、火の中を逃げる人、逃げ場を失い逃げまどう人、助けを求める人たちが

【呉空襲】

呉地区の空襲は、市街地が炎上した45年7月1～2日を中心に同年3月19日から同7月28日まで計14回あり、呉市史や県警察史などによると犠牲者は軍関係を除いて約2千人とされています。

7月1～2日の空襲では、152機のB29から、16万454発もの焼夷弾を、すりばち状の呉市街地の周辺から中心部へと投下しました。市民は逃げ道を封じられ、防空壕に逃げ込んだ人たちも、猛烈な火災や吹き込む煙にまかれて蒸し焼き状態になり、無残な死をとげました。

この空襲による犠牲者は2,000人以上とも言われ、約337ヘクタールが焼失し、12万5千もの人々が家を失いました。

けて機銃掃射で撃ってきます。人の頭が飛び、手が飛び、「痛い」という声は呻き声^{うめ}しか出ない姿で息を引き取る人や、お母ちゃんと泣き叫びうずくまる子供目がけて機銃掃射で撃ってきます。「アッ」、「ウッ」と叫ぶ声が遠く聞こえるだけです。生き地獄の中、悲惨と苦しむ姿はただむごいとしか言いようがありません。悔しいです、情けないです。敵は昼も夜となく撃ってきます。修羅場⁽⁵⁾となる中、7月8日には住み慣れた我が家が丸焼になりました。戦火は激しさに激しさを増していきます。敵機が去り、警戒警報が発令になると「小瀬音八⁽⁶⁾」さんと言うお父さんが、娘さんの着物を思い出したように取りに帰り、柳行李^{やなぎごうり}を抱え防空壕^{ごう}の入口まで来た時、どこから飛んできたのか敵の機

銃掃射を受け、息を引き取りました。娘さんの着物の端布⁽⁷⁾が左手に引っ付いたままの姿で死んでいった悲しい思い出は、くやしくて子供心に忘れることが出来ません。防空壕^{ごう}生活は想像以上のもので、布団も無い土の上にムシ口を敷き、食べる物は乾パンを食べながら飢えをしのぎました。雨が降ればみんな雨で身体を拭いていますが、大変なもので死体の匂いがプンプン臭ってきます。きな臭い焼け跡の臭いととも、涙を流す人たちがただ一人として嫌な顔をする人もなく、お愛想に「無残やなあ。」と言いながら、死体に手を合^あわし冥福を祈るだけです。着の身着のまま、私の頭には「シラミ」⁽⁸⁾がわきました^{かゆ}が、痒いと思^{かゆ}ったことはありません。1ヶ月以上の防空壕^{ごう}生活も警戒警報が解除になり、姉と私は我が家に帰り軍港を見た時、病院船⁽⁹⁾が艦砲攻撃⁽¹⁰⁾を受け、船体が横に傾きながら沈んでいきます。白衣を着て片足の無い兵隊さんや両足の無い兵隊さんが逃げ場を求めているのが見え、その中に頭全体に包帯を巻いた兵隊さんが大声で叫びながら海の中へ身を投げました。再び空襲警報が発令になり、母は私たちにバケツで水を掛け、母も水をもう一杯かぶり私たちを引きずるように防空壕^{ごう}へと入ると、後も振り向かず一目散に帰って行く。母の後を追^おい「お母ちゃん」、「お母ちゃん」と泣く私の手を姉が力一杯ひっぱり、2人で泣き抱き合いました。今思うと、あの時の母の気持ちが痛いほどわかります。昭和20年8月15日、天皇陛下自らラジオを通して戦争が終わった放送を聞き、子供心に流れる涙が止まりませんでした。私たち家族は無事再会できましたが、母は私たちを諭すように強い口調で「戦争の犠牲者になり悲しんでいる友の事を決して忘れてはいけません。人の心の痛みの解る人間になるのよ。」と言いながら、私たち2人をきつくきつく抱きしめ、いつまでもいつまでも離れようともせず、姉と私の首筋に熱い母の涙が一すじ二すじと伝わってくるのが解りました。母と子、子と母の強い絆^{きずな}の涙でした。二度と味わいたくない戦争の苦しみは、生涯消えることのできない1ページとして、私の中で深く深く閉ざしております。昭和60年1月7日、母は81歳で眠る如く⁽¹¹⁾霊山へと旅立ちました。私は母の遺影⁽¹²⁾を抱いて50年ぶりに呉の地を踏みました。涙はとめどなく流れましたが、昔の面影は跡形もなく、静かな海の上を小舟

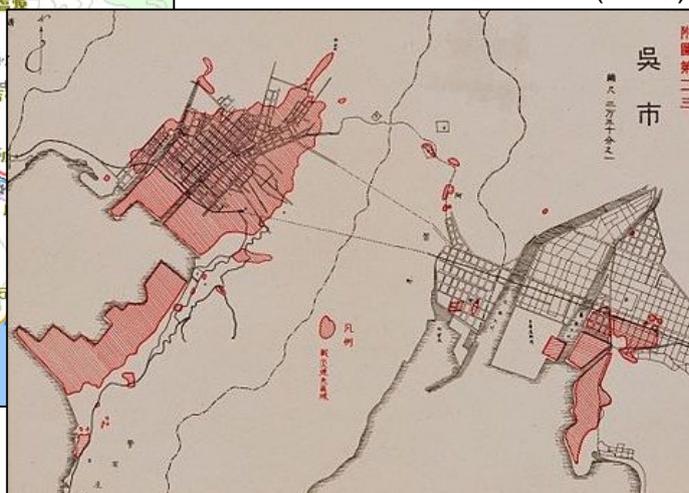
が行きかう平和な街並みへと変わっていました。あの戦火の中で傷を受けた夾竹桃は大きく成長して、私を快く迎えてくれました。暑い夏の日に美しいピンクの花を咲かし、私の心を和ませてくれる大好きな花です。今こうして私が幸福な生活が送れる事も、こうして苦しい中で最大に人生を生き抜いた賜物と、感激でいっぱいです。平和の心を祈りながら、幸せへの道を歩み続けてまいります。

- 1 親子焼夷弾...親弾の投下後、時限装置により空中で分解し、中の子弾が広範囲に拡散するしくみの焼夷弾。
- 2 灯火管制...夜間、空襲に備え、灯火を消したり覆ったりして光がもれないようにすること。
- 3 焼米...備蓄用の食料。もみをいって殻を除いたもので、水や湯をかけ、あるいはそのまま食べた。
- 4 乾パン...保存・携帯に便利なように固く焼いたビスケット状の小形のパン。
- 5 修羅場...戦乱や闘争で悲惨をきわめている場所。
- 6 柳行李...小林市雄さんの体験記にある注釈のとおり
- 7 端布...はぎれ。半端な布切れ。
- 8 シラミ...シラミ目の昆虫の総称。吸う口を持ち、人間や家畜の血を吸う害虫。
- 9 病院船...戦時に傷病者や海難者らを収容し、加療しながら輸送する船。
- 10 艦砲攻撃...軍艦から陸上への砲撃。
- 11 霊山へ旅立つ...亡くなること。
- 12 遺影...亡くなった人の写真。
- 13 夾竹桃...インド原産の樹木。夏に紅色の花をつける。

【現在の地図（呉市付近）】



【呉市の罹災状況(当時)】



18歳の夏

和多孝行さん

昭和20年5月，第一期海軍特別幹部練習生として大竹海兵団に入団。基礎課程が終る7月⁽¹⁾ジフテリアに感染し岩国海軍病院で⁽²⁾加療中，奇しくも8月6日，広島に投下された新型爆弾（原子爆弾）⁽³⁾炸裂直後の模様を⁽⁴⁾望見した。

広島と病院（山口県藤生町）とは直線距離で約40キロ，厳島が左手に見える外は海上に遮るものはなく，視界は抜群。

その日は朝から快晴。海岸近くの丘に建つ伝染病々棟2階の大部屋で，15名の病兵が安静時間をベッドですごしていた。

突然，「ドドーン」と⁽⁵⁾はら⁽⁶⁾肚に⁽⁷⁾応える轟音。轟音。「何だ！ 空襲か！」室長が窓へ走る。先任は階下の事務室に飛んだ。先日，屋上の赤十字マークを無視した米艦載機の機銃掃射を受けたばかり。病兵ながら⁽⁸⁾敏捷であった。

外を見ると，広島の上空に積乱雲のような大きな煙が，立ち昇っていた。

「⁽⁹⁾弾薬庫か。手荒くやったもんだ！」

⁽¹⁰⁾パラオ警備隊還りの水兵長が⁽¹¹⁾つぶやく。灰黒色の煙は生き物のように横に拡がっていく。

不気味に成長し形を変え，キノコのようになってきた。広島⁽¹²⁾の街がスッポリと傘の下，という状況。余りの変化に言葉が出ない。

しばらく経ってみると，雲は更に拡がり⁽¹³⁾近郊まで達して垂れ下がり，⁽¹⁴⁾霞んでいた。どうやら夕立らしい。

午後になって情報が流れ，弾薬庫などの爆発ではなく，米爆撃機B29が投下した新型爆弾の⁽¹⁵⁾炸裂で被害甚大，市街が⁽¹⁶⁾壊滅したという。

家屋，施設は⁽¹⁷⁾倒壊，死者・負傷者続出だが詳細は不明。医療機関の機能不能。他市町村隣県から応援が入っているとのこと。当院にも出勤命令が下ったという。⁽¹⁸⁾道理で昼の検温時に，明るく元気者の⁽¹⁹⁾K当直看護婦が，姿を見せなかったはずである。

それにしても何と恐ろしい爆弾だろうか。ただの1発ですさまじい破壊力。驚くばかり。

更に3日後、長崎にも投下。この調子が続けば日本が完全に⁽¹⁷⁾ 廃墟^{はいきよ}となる日は遠くはない。

「日本もいよいよ⁽¹⁸⁾ 最期か」ふとそんな想いが^{かす} 掠めるのだった。数日後、被爆の実状を目のあたりにすることになる。

念願の退院が12日の午後に決まった。部屋の出入口にも近いベッドともサヨナラ！

当日の昼食後、病棟看護婦長、室長に挨拶をすませ、病院本部に向う。そこで配置先・呉警備隊入隊の指示を受けた。

藤生駅の時計は時刻表を過ぎていたが、改札口には乗客の列。輸送は⁽¹⁹⁾ 軍需優先、それに警報発令が重なりダイヤの乱れは⁽²⁰⁾ 日常茶飯時。

やがて広島行が到着、超満員である。だが乗らなくてはならない。強引に割り込みステップに立ち、握り手金具に腕を通す。背負った⁽²¹⁾ 衣囊が人に迷惑するが、許しを願う他はない。この場所は涼しく視界満点。しかし⁽²²⁾ 粗悪な石炭^たを焚くSLの吐く不燃の粒が、顔を直撃する。まさに光と影であった。

懐かしい大竹駅を出ると^{はつか} 廿日市駅。太田川の鉄橋も近い。ここを渡り切ってから沿線の庭木がおかしい。変色した葉、黒ずんだ幹と普通ではなかった。列車が徐行なみの速度だからよく見え、分かり易い。

列車が進むにつれて変貌してきた。木の葉が茶褐～赤褐色、幹が焦げて黒い。アカマツの大木が南面する葉は赤褐色、幹が炭化して居り、木を縦に自然色と2色塗りしたようで、とても天然木とは思えない。

石の鳥居、^{とうろう} 灯籠が倒れて散乱し、角がとれて変形していた。石垣が黒ずみ、割れ、中にはタマネギを剥いたような割れ方もあった。

よほどの高熱に^{さら} 曝されたに違いない。家屋の破損、倒壊が増え満足なものはない。広島駅に入構。目に飛び込んだのは屋根のない駅舎、プラットホーム。プラットの屋根を

支える鉄骨が^{あめ}飴のように曲がって線路に垂れ、コンクリート床の中央が大人の拳が入る程に割れて傾き、端まで続く。駅舎の壁に上から下へイナズマ型の裂け目があり、^{あわ}憐れな姿で真夏の太陽を浴びていた。呉線発車まで街を見ようと地下道に降りる。

そこには担架がズラリ。担架の上には顔中に白い塗り薬、顔や手足を包帯巻き、とさまざまな姿で横たわっている。傍らに^{すわ}坐り、立膝に顔をうめる女性もいた。臨時収容か、移送中なのか。被爆後1週間が経とうというのに。玄関に出る。街がない。見渡す限り^(23)がれき瓦礫。

^(24)軍都・^(25)広島^(26)の面影は一片も留めず、荒涼とした光景の中、傾くビル、半壊の土蔵、黒焦げの大木が点々とするのみ。その中を、海風が^{おう}嘔吐を催させる^(27)異臭を運んでくる。想像以上の光景に立ち^{すく}竦み言葉もない。

やる瀬なく目を落すと、裂けた水道管が水を噴き、小さな虹を作っていた。地獄絵の中に虹…。思わず近寄り、時を忘れて眺めていた。

あれから70年。世に「^(28)美しき10代」というが、わが10代 - 18歳の夏は^{ちまた}巷の言とは縁遠く、二度と望まない夏でした。

-
- 1 ジフテリア...ジフテリア菌の感染によって起こる、主として呼吸器の粘膜がおかされる感染症。
 - 2 加療...気やケガの治療をすること。
 - 3 炸裂...砲弾などが激しく爆発すること。
 - 4 望見...遠くからながめること。
 - 5 前任...先にその任務・地位に就いていること。また、その人。
 - 6 階下...下の階。
 - 7 敏捷...動作がすばやいこと。
 - 8 弾薬庫...弾丸や火薬を貯蔵する倉庫。
 - 9 パラオ警備隊...パラオ諸島の防衛に参加した部隊。
 - 10 水兵長...旧海軍における水兵科の兵の最上位の階級。
 - 11 近郊...都市や町に近い場所。町はずれ。
 - 12 甚大...物事の程度が非常に大きいさま。はなはだしいこと。
 - 13 壊滅...すっかりこわれてなくなること。
 - 14 倒壊...建物などが倒れてこわれること。
 - 15 道理で...そうである原因・理由がわかって納得するさま。

- 16 当直...日直や宿直にあたること。また、その人。
- 17 廃墟...建物や街などの荒れ果てたあと。
- 18 最期...死にぎわ。
- 19 軍需...軍事上必要とされること。また、その物資。
- 20 日常茶飯事...毎日のありふれたことがら。
- 21 衣囊...海軍下士官兵が衣類を整理して入れておくキャンパス製の布袋。
- 22 粗悪...粗末で質が悪いこと。
- 23 瓦礫...破壊された建造物の破片など。
- 24 軍都...軍の施設の多い都市。
- 25 一片...ひときれ。ひとかけら。
- 26 土蔵...外壁を土や漆喰(しっくい)などで塗り固めた倉庫。
- 27 異臭...変なにおい。いやなにおい。
- 28 巷...世間。世の中。

3

戦中・戦後の体験

私の戦争体験記

大 月 佐喜代 さん

戦争体験記と言っても私はまだ9歳頃で、骨ずい炎にかかり、倉敷駅付近の赤木外科病院（西ビルと若者の宿あたり）に入院しておりました。2階の病室下の道から毎朝一定の時刻になると、勇ましい軍歌のような力強い若者が歌声高らかに行進して行きました。今にして思うと水島線(1)に乗って三菱重工業水島航空機製作所びしに行っていた事が（今朝の新聞で）わかりました。その当時入院しても、手術して悪い所を取りガーゼ交換(2)（リバノールと赤チン(3)）しかありません。戦後間もなく抗生物質(4)ができ、足は治りました。病院の小庭ではあちこちで七輪で自分の食事を作っていました。母は毎日、西中新田東中（今の役所）の辺りから歩いて、家の事を済まし来てくれました。家は農家だったので、忙しい頃は倉商(5)の生徒さんが4～5人手伝いに来てくれました。

病院の2階の部屋から見える所に人々が並んで、食料品を手に入れている光景も見ました（今のへん見歯科裏道）。戦後になって、病院のすぐ前の道（旧国道2号線）で闇市場(6)が立ち並びにぎやかでした。また、広島に原爆が投下された翌日には、どんなにして来られたのか、患者さんが何人か痛々しい形相で来られていました。前日は西の空は真赤だったのも見えました。

父は3人兄弟の長男で海軍から帰りましたが、弟は近衛兵(7)で東京から帰り、19年に比島（フィリピン諸島）作戦に岡山から出征し、死亡しました。従妹は百日で母に抱かれ駅まで連れて見送り、それが最後でした。伯母は「しづえ（老松）」の踏切で見送ったのが最後だったそうです。何と悲しい事でしょう。出征の折、日の丸の旗や海軍の旗のきから庭にひらめいたのを3回みたこととなります。幼少の頃は、はしゃいで眺めていたと思います。悲しかった家族のことは、私にはまだわかりませんでした。残った祖父は2つ違いの弟をおぶってトラクターや牛を使っていました。残った人々は、苦勞の連続だったと思います。資料として祖父が大切にしていた「岡山県戦没者名簿（倉敷）」

を私が持って時々叔父を偲^{しの}んでおります。

この様な戦争があって今があるのだと、時々思い出します。

-
- 1 水島線...水島臨海鉄道のこと。
 - 2 リバノール...殺菌・消毒に用いる外用剤。皮膚を刺激しないので、外傷ややけどなどに用いる。
 - 3 赤チン...マーキュロクロム水溶液のこと。皮膚・粘膜及び創傷の消毒などに用いる。
 - 4 抗生物質...ペニシリンなど、カビ・放線菌などの微生物によってつくられ、他の微生物や細胞の発育または機能を阻害する物質。
 - 5 倉商...岡山県立倉敷商業高等学校のこと。
 - 6 闇市場...正規でない方法や価格における取引が行われる市場。
 - 7 近衛兵...大日本帝国陸軍の師団の一つ、「近衛師団」に配属された兵。

戦争の思い出

三宅正枝さん

昭和20年8月9日、⁽¹⁾灯火管制が続き全ての家の灯りが漏れないようにしていたのに、急に昼のような明るさに驚き戸外に飛び出すと、大きい⁽²⁾照明弾が宙づりになっていたが、他に何事もなかったので、そのまま寝て終わった。

翌朝、巡査が来てすぐに駅に集合との事で、リュック1つ持って駆け付けると、既に貨車いっぱい人が詰め込まれていた。当時北朝鮮にいた私は⁽³⁾満鉄に勤めていたが、事情があって終戦直前に辞めていた。何も知らされず貨車に乗り、止まった所で降り、小学校の校舎に1泊した。翌日、全く連絡が取れない、各自で南下せよと言われた。誰も何も言わず黙々と歩いたが、気が付けば一緒に避難した朝鮮人は1人も居なかった。守ってくれると思っていた⁽⁴⁾憲兵巡査が1番に逃げ、元気な男性は全て前日現地⁽⁵⁾召集され、女子供老人があてもなくただ黙々と歩いた。9月になっていただろうか、⁽⁶⁾ソ連の兵隊が先に進み、敗戦国民が味わわねばならぬこと全てを味わった。

下着だけで赤ちゃんをおんぶしていた女性に、「どうしたの?」と尋ねると「朝鮮人に身ぐるみ剥がされた。」と言っていた。あの人はどうなっただろうか。野に寝たり山に寝たりで、血の小水が出たと言っていたお年寄りはどうなっただろうか。北朝鮮に居た私は戦争中に空襲もなく、⁽⁷⁾配給も優遇され余り苦しみは無かったが、戦に敗れ立場が逆転し、日本人避難民どもと叫ぶラジオの声に⁽⁸⁾望郷の念を募らせた。家政婦や農家の手伝いなどにも行ったが、日本に帰れるようになるまでずっと居なさいとよく言われた。

自分より困っている人を助ける。人間としての素直な心は、田舎の人の方が勝っているとよく思ったものだ。逆の立場だったら言えただろうかと恥ずかしく思う。同じく北朝鮮にいた従妹は、出産10日目に夫が召集され、2日後にソ連進入で避難を余儀なくされた。3人の子供を連れていて、生まれたばかりの赤ちゃんを抱いた従兄の会社の社長が、自分の家族を探さねばと、私の母に赤ちゃんを預けて立ち去った。私もその赤ち

ちゃんをよく抱いて歩き，ロシア人の難を逃れることができた。略奪暴行はどここの国でも敗戦国民が味わわねばならないようだが，法に守られねばそれが人間の本性であろうと悲しく思う。戦争が無ければ当時の生活が続けられたのにとと思うが，朝鮮人は日本が戦に敗れたから束縛されない生活を取り戻せたのだ。

当時勤めていた満鉄の職員に1人朝鮮人の女性がいたが，その人の父親は同じく満鉄で2等バスを貰^{もら}っていた。敗戦で引揚げの途中その人に会った。日赤⁽⁹⁾の腕章を巻いていて毛布や缶詰をくれ，銀行が開いていればお金をあげられるのにと言った。その毛布は日本人の男性に取られ売り飛ばされた。朝鮮人に助けられ日本人に裏切られ悲しかった。中国と戦争をしていたのに，近くにいた中国人が父の兄に世話になったとよく餃子^{ぎょうざ}を届けてくれていた。中国人は恩を忘れないのだと父が言っていたが，全ての人に当てはまるかどうかは判らないが，人間性に隔たりは無いと思う。現在，日本の支配から逃れた朝鮮が分断されているのを気の毒に思う。特に北朝鮮は恵まれていないようで，親しくしていた人がもうこの世にいない人が多いだろうと，晴れた青空を眺め，この空が朝鮮に続いているのだと切なくなる。

どうかこの国も戦争など起こさず，どこの国が関わりなく平和に暮らせるように，そのための努力を惜しまず生きて欲しいと切望する。

空の青雲の白さよ戦のさなかにありても空かくありき

振り返る若人の散華⁽¹⁰⁾せん日もかく空は青々としてすみ渡りいし

征⁽¹¹⁾きしまま帰らぬ人^{しの}を偲び居り70年経ても消えぬ面影

-
- 1 灯火管制...戦時において民間施設および軍事施設・部隊の灯火を 管制し、電灯、ローソク等の照明の使用を制限すること。
 - 2 照明弾...飛行機・船舶・車両などから夜間などに発光する物体を空中に放ち、周囲を照らし視界を確保または合図を行うためのものである
 - 3 満鉄...南満州鉄道株式会社の略称。日本の 満州 経略上のかなめとなった半官半民の国策会社。

- 4 憲兵...隊内の秩序維持を主任務とする兵隊。日本では明治 14 年(1881)に陸軍に設置され, 犯罪捜査・軍紀維持・思想取り締まりにあたったが, 次第に権限を拡大し, 公安対策・思想弾圧・防諜などにも強い権力をふるった。
- 5 召集...呼び出し集めること。
- 6 ソ連...ソビエト社会主義共和国連邦の略。
- 7 配給...品物などを一定の割合でめいめいに配ること。
- 8 望郷...ふるさとをなつかしく思いやること。
- 9 日赤...日本赤十字社の略。
- 10 散華(さんげ)...亡くなること。特に, 若くして戦死すること。
- 11 征く...敵を討ちに行く。

私の少年時代の疎開体験

岩田 侑三 さん

私は今年 80 歳になります。太平洋戦争末期は、国民学校 4 年生でした。その頃、兵庫県の尼崎に住んでいました。昭和 19 年 7 月頃より、京阪神地域でも、「警戒警報、空襲警報」が頻繁に出され始めました。学校では、国民学校児童を安全な場所に疎開させることを検討していたようです。⁽¹⁾ 集団疎開としては、日本海側の田舎のお寺など、⁽²⁾ 縁故疎開では、両親の生家や田舎の親戚などへの疎開です。

私は、その年の 8 月 13 日、母親の生家がある倉敷市東町（現本町 森田酒造西隣）に疎開することになり、祖父母、叔父伯母にお世話になることとなりました。旧国鉄で甲子園口から三宮で乗り換え、4 時間あまりをかけて倉敷に着いたように覚えています。⁽³⁾ ^{あまがさき} 尼崎市立^{むこ}武庫国民学校から⁽⁴⁾ 倉敷東国民学校に転入したのです。



倉敷東小学校（昭和 10 年頃）

当時は、夏休みでしたが、町内生徒と共に、⁽⁵⁾ 手旗信号・⁽⁶⁾ モールス信号・訓練実習に努めました。現在とは違い、各家庭には兄妹も多く、みんなと仲良くなり、年長者から丁寧に教えてもらいました。良いことも悪いこととして一緒に遊んだもの

です。当時は、「いじめ」のようなことはなかったように思います。学校にプールなども無く、老松町の川まで泳ぎに行きました。

子どもたちは、着ている服に、住所・本人氏名・世帯主氏名（私は祖父氏名）・続柄・血液型を書いた白い布を必ず付けていました。町内の子どもたち皆で自宅から学校まで通いました。

祖父母の家に疎開してから、4 年生の間は、学校で勉強もできましたが、5 年生の 5

月になると勉強どころでは無くなり、^{くわ}鋤を持って向山で⁽⁷⁾開墾作業をして、「サツマイモ」の植え付けが日課になりました。文字通り青空教室です。先生の監視も厳しく、懸命に作業に努めれば、国語の本を読むことができるが、怠けるといつまでも作業に努めねばならない制度でした。

戦争中は、阿智神社前の北階段（現本町 森田酒造前）に向かって、一般市民はもちろん、通学中の倉商・倉工・倉女（現青陵高校）の生徒たちも自転車から降りて、「戦争に勝ちますように」と⁽⁸⁾合掌する毎日でした。

記憶では、当時鶴形山トンネルの中で学徒動員の生徒諸君が飛行機部品製造の作業をされておられたように思います。私たちは、下校時のみ、トンネル横の階段を利用し、観龍寺から井上家住宅経由で帰宅していました。

その年の6月17日から22日には、大高の農家へ勤労奉仕作業に行っていました。この頃、B29爆撃機が、何機も東に飛んで行くのを見て、幼心にも恐ろしくなり、畑の中から南の空を見た記憶があります。

岡山の空襲は、6月29日の深夜でした。私も防空壕^{ごう}に避難しました。早朝、東の空を見ると真赤であったことを今でも思い出します。祖父が「次は倉敷が空襲にあうかもしれぬ」と疎開先を検討してくれ、総社や足守の親戚を廻^{めぐ}ってくれるが、別の親戚も入居しており、7月上旬にやっと、総社町服部（現総社市金井戸）の祖父親戚にお世話になることとなりました。

疎開先は決定したのですが、交通面に問題があり大変でした。当時は客車が少なく、貨物車優先の時代で、伯備線の汽車に乗れませんでした。

そこで、倉敷の街から総社市の金井戸まで、数回徒歩にて祖父母と共にリヤカーで荷物を運びました。当時10歳です。到着するまで大変でした。歩いて何時間もかかり、7つ池での休憩は、何よりの楽しみでした。思い出してもよく歩いたものです。汽車が利用できても同じで、総社駅より東に約50分もの道のりを時間をかけて歩き、疎開先まで頑張りました。

倉敷東国民学校から⁽⁹⁾総社町立服部国民学校へと転入しました。真夏にて、勉強もそこで、短い期間でしたのであまり記憶がありません。しかし、夏休みの宿題の「干草」⁽¹⁰⁾10貫目刈って提出するようにとの宿題には弱りましたが、8月の終戦により中止となり助かりました。当時は、「食べることと逃げるのが合言葉」でした。

飛行機で沖縄へ飛び立つ⁽¹¹⁾予科練⁽¹²⁾特攻隊の志願者だったのでしょうか。当地出身者だったのか、村の上空を何回か旋回され、家族との最後の別れだったのでしょうか。最後に翼を左右に振られて飛び立って行かれる風景を数回見かけ、涙が出た記憶が残っております。

昭和20年8月15日の正午ごろ、隣の家で天皇陛下の玉音放送を近所の人とラジオにて聞いていたのですが、内容がわからず、皆さん泣いておられて、日本が負けたことを知らされました。終戦により、再度倉敷の祖父母の家に帰り、9月にはまた倉敷東国民学校に転入しました。

学校の教育方針が180度変わり、自由主義となり、先生諸氏も戸惑いがありました。教科書も軍国主義的な箇所は、次々と「墨」で塗り潰すのです。広島原爆投下の説明なども。そして、10月下旬に1年2ヵ月ぶりにやっと尼崎市へ帰郷し、母・兄に再会しました。学校も尼崎市立武庫国民学校に帰ったのです。結局この間に、尼崎・倉敷・総社の3ヶ所の国民学校を転出転入合計8回しました。

戦中・戦後にて、当時は、遠足も学芸会も運動会も無く、もちろん6年生の修学旅行も無かった時代でした。時代が時代だけに、教科書も十分ではなく、新聞紙同様の教科書でした。私の小学生時代はこの様な時代でした。

今思い返すと、71年前ですが、9歳から10歳のころ、このような経験をしました。その後社会に出て、苦労もありましたが、当時のことを思い出し、忍耐力・協調性・健康には、人に負けないように頑張ってきた。今思うと、このような戦争の時代は二度とあってはならないと思います。

- 1 集団疎開...集団で行われる疎開。特に，第二次大戦中の学童疎開をいう。
- 2 縁故疎開...親類や知人を頼ってする疎開。
- 3 国鉄...日本国有鉄道法に基づき日本の国有鉄道を運営していた事業体である日本国有鉄道の通称名。
- 4 倉敷東国民学校...現在の倉敷市立倉敷東小学校。
- 5 手旗信号...手に持った赤・白の小旗で一定の形を表して通信する信号。
- 6 モールス信号...短符号（トン）と長符号（ツー）の2種類の組み合わせによって文字を表し，船舶間の通信や海難事故の救助信号として利用された。
- 7 開墾...山野を切り開いて農耕できる田畑にすること。
- 8 合掌...両てのひらを顔や胸の前で合わせて拝むこと。
- 9 総社町立服部国民学校...現在の総社市立総社東小学校のこと。
- 10 貫目...重さの単位。1貫目 = 3.75 k g
- 11 予科練...「海軍飛行予科練習生」の略称。小学校高等科卒（乙種），中学四年修了者（甲種）を主とする志願制で，訓練を経て飛行科下士官となった。
- 12 特攻隊...特別攻撃隊の略。生還の見込みが通常よりも低い決死の攻撃，もしくは戦死を前提とする必死の攻撃を行う戦術部隊のこと。

戦場へ行かない戦争体験記

吉岡 謙 さん

1945年8月15日に太平洋戦争が終わった。我が家や身内にはこの大戦によって死亡した者はおらず。家も戦災には会わなかったが、私の戦争体験は終戦から始まった。私は当時、小学3年生だった。

戦後間もなく、戦勝国の⁽¹⁾連合軍が我が国へ⁽²⁾進駐して来た。倉敷には、現在東中学校が建っている所にあった日本軍の軍服などを作っていた被服廠の工場が進駐軍に⁽⁴⁾接收され、そこへ連合軍が進駐していた。

その際に、私が住んでいた家は、⁽⁵⁾山麓の小高いところにあって、外観が洋館風だった為に、駐留しているところから目立って見えていたらしく、駐留している軍の高官の住宅として接收され、立ち退きを命じられた。

父は貧乏学者だったが、本や資料が大量にあった為に、それらが収まる家が必要だったので、進駐軍が指定した立ち退き期限内には転居できそうになく困ったが、近所の養鶏家の善意で、空いていた鶏舎の一部へ、本や資料と共にかろうじて引越した。その後まもなく、養鶏場の事務所として使っていたと思われる建物を手入れして、一間だけの畳敷の部屋を作って住居として貸して下さり、本や資料は鶏舎へ置いたまま人間だけが移り住んだ。

何か月か経って、白楽町に住んでいる父の⁽⁶⁾遠縁から、貸していた借家が空いたとの連絡があり、そこへ転居して1年以上を過ごしたと思う。

その後、進駐軍は撤退して、私の家は返還されたが、原状には戻されてなく、補償も全く無かったが、敗戦国の悲しさで、文句ひとつ言えなかった。

喜んで我が家に帰ったが、そのあまりの変わり様にびっくりした。我が家は市の台帳によれば、1928年の建築で、設計は有名な建築家の西村伊作^{いさく}で、現在は岡山県近代化遺産になっている。

しかし進駐軍は、外壁の小さな砂利を含んだ凹凸のある漆喰壁⁽⁷⁾は、全体にペンキで塗りつぶして、玄関から道路までの間には、雨除けらしい廊下のようなものが付けられ、家の東側には二間が増築され、南側にあったテラスは撤去されて接している部屋が広がられていた。家の裏には、高さが4 m位の屋根だけで壁のないボイラー建屋ができていて、風呂給湯用のボイラーが据えられていた。その隣には現場打ちの形だけの自然曝気⁽⁸⁾式⁽⁹⁾の浄化槽が埋められていた。

家の中に入ると、家中の壁や建具などにはすべてペンキが塗られ、和室の板の天井は漆喰⁽¹⁰⁾で塗られた上にペンキが塗ってあった。廊下・洋室・トイレ・洗面所・台所・階段などの床や踏面は、土砂が付着した靴で歩いた為に傷だらけで、ささくれているところが多く、とても裸足では歩けなくなっていた。和室の畳は全部上げられて、そのままだと床面が低くなるので、床上げされていた。風呂は大きくて長いタイル貼りの浴槽に変わっていたが、この風呂に入浴できるだけの湯を張るには、当時薪灰屋⁽¹¹⁾で売られていた「まき」が約6把必要で、入浴には大変苦労した。トイレは水洗になっていたが、長期の使用は考えていなかったらしく、浄化槽の蓋はコンクリートで塗り固められていて、浄化槽の管理は不可能になっていた。

進駐軍が行ったりリフォームはもの凄くお粗末で、返還後入居してから後、何部屋もの漆喰天井が落ちたり、建具が曲がって動かなくなった為に隙間が出来て雨風が入ってくる有様で、その都度手入れして生活してきた。

畳敷の和室は畳を上げて床上げされていたので、そのまま畳を入れるとドアの開閉が出来なくなるために、大工に頼んで切り下げて畳を敷いた。

その他のところには、持ち帰った父の本や資料が山積みになっており、父はそのどの位置にどのような本や資料があるのかを良く憶えていて、家人がそれらに触って動かすと分からなくなると言う事から、父が亡くなるまでは本や資料の移動を伴う改修工事は出来なかった。

我が家が進駐軍に接收されて40年以上経って、父が亡くなった翌年の1987年か

ら、ようやく本格的に改修を行うことができた。長期間にわたってかなりの費用を必要としたが、建築に詳しい人に言わせると、費用の面からだと一度全部壊して立て替えた方が安くついたはずとの事だった。

戦争体験と言うと、戦争で亡くなった人々や家を空襲で焼かれたことなどに思いが行くのは当然だとは思いますが、私達のようなこともあったのだと言う事を知っていただき、私達のような犠牲者を2度と作ることの無い世の中になるよう願っている。

-
- 1 連合軍...ドイツ、イタリア、日本と敵対したアメリカ、イギリス、中華民国、ソビエト連邦などの国家連合軍。
 - 2 進駐...軍隊が他国の領土内に進軍し、そこにある期間とどまること。。
 - 3 被服廠...旧日本陸軍部隊に支給する被服品の調達、分配、製造、貯蔵を担当した工場と、これを統括した機関の総称。
 - 4 接收...国などの権力機関が、個人の所有物を強制的に取り上げること。。
 - 5 山麓...山地と平地の境界部。
 - 6 遠縁...遠い血縁。また、その人。
 - 7 漆喰...消石灰に粘着性物質と麻糸などの繊維を加え、水でよく練り合わせたもの。砂や粘土を加えることもある。壁や天井などを塗る。。
 - 8 現場打ち...コンクリートやリベットを工事現場で打ち込むこと。。
 - 9 曝気...空気と排水とを接触させて酸素を供給すること。水質の浄化を行う微生物に酸素を供給する基本的な方法
 - 10 踏面...階段の足を載せる板の上面。
 - 11 薪炭...たきぎとすみ。

戦後七十年の想いを歌に

岡 部 学 さん

父が戦争で尊い命を⁽¹⁾祖国に^{ささ}捧げ戦没し、母と私が遺族となりました。戦争の記憶はわずかながらで、母の実家（福田町福田南）の東にある山のふもとの防空壕^{ごう}、その中で西の空に爆撃機（B29）が飛び、爆弾が落ちてくる光景、そして戦争後の幼少の頃に戦争の⁽²⁾遺留品を見たことぐらいです。

私は遺児として母の実家で何不自由なく育てられましたが、中学生になると我が家では無いと、真剣に将来のことを考えるようになり、叔父の農業、母の内職の手伝いをしながら勉強しました。高校生になると自分の家を建てたい夢を持ち、一生懸命でした。卒業後、水島の会社に就職し、交代勤務で5年間働きながらも大工さん2人の下手間をし、悪戦苦闘の2年間でやっと生活の出来る状態の新居ができました。皆さんに感謝感激でした。

今までの想いを作詞しました。

「平和な時よいつまでも」

一 .	生まれた時は	戦争だ	今も脳裏に	あの空が
	思い出させる	爆撃機	おさな心に	おそろしく
	何が起きたか	わからない	平和な時よ	こないかな
二 .	子どもの頃は	腹ペコだ	みんな食べたよ	芋ごはん
	忘れられない	母の味	遊び疲れて	しかられて
	いつも枕を	抱いて寝る	平和な時よ	早く来い
三 .	大人になった	現実には	日夜仕事に	明け暮れて
	夢を追いかけて	ひたすらに	やっと ^{かな} 叶えた	僕の家
	父の遺影に	手を合わせ	平和な時よ	いつまでも

平成18年4月より、母に「⁽³⁾遺族会(福田)のことを引き継いで。」と頼まれ、何もわからないまま交代して遺族会の皆さまにいろいろ教わりながら行事に参加し、お世話もさせてもらっています。平成25年より近くの水島緑地福田公園内にある「平和の鐘」を鳴らして黙とうし、二度と戦争のない平和な世界を願いに行っています。その想いを作詞しました。

「平和の鐘を鳴らそうよ」

一． 高く澄んでる 青空に 突然すさまじい 空襲が
炎の手が上り 焼け野原 怖く悲しい 戦争は
ああ 平和の鐘を 鳴らそうよ 鳴らそうよ

二． まるでならくの あの時代 多くの命が 失われ
苦しくつらい ことばかり 今の幸せ 感謝して
ああ 平和の鐘を 鳴らそうよ 鳴らそうよ

三． 二度と戦争 しないよう 子や孫たちへと 伝えよう
希望に満ちた 明日のため 世界平和を 願いつつ
ああ 平和の鐘を 鳴らそうよ 鳴らそうよ
ああ 平和の鐘を 鳴らそうよ 鳴らそうよ

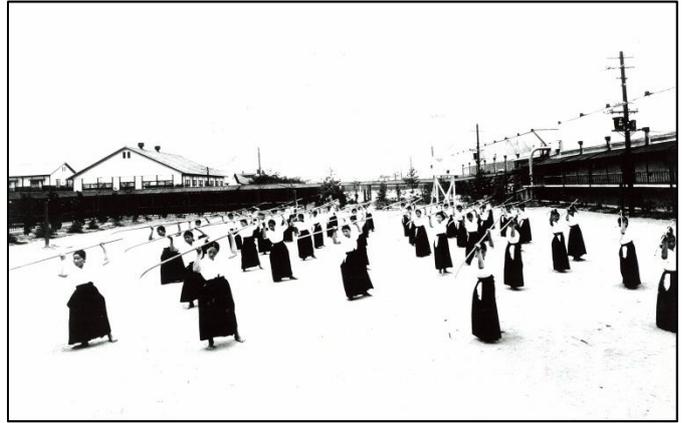
-
- 1 祖国...先祖から代々住み続け、自分もそこで生まれた国。
 - 2 遺留品...死後に残した品物。遺品。
 - 3 遺族会...戦没軍人の慰霊、遺骨収集、遺族の福祉をおもな目的とする団体。

戦争の頃の小学生の生活の様子

岡 本 末 子 さん

私が国民学校2年生の時、戦争が始まりました。寒い日の朝、皆と並んで学校へ行っていました。酒津から子供の足で40分はかかります。その時、どこかのおじさんが「戦争が始まった」と言いながら、自転車で走って行きました。これは恐ろしいことだ、どうしたらいいのかと、私は心の中で考えながら学校に行きました。3年生になってから、もう学校では勉強する時がないくらい、兵隊さんが乗っている汽車が通る時間が来ると、毎日山陽本線の線路沿いに立って旗を振りながら見送ってあげました。夏休みは馬の食べる草の草刈が宿題でした。1人何束と決められていたので、私は父と一緒に山の方や河原の方へ行って^{あし}葦やススキを刈って干して、大きな束をいくつも作り学校へ持って行きました。高梁川の土手は昔は道はなくて、^{きれい}綺麗な芝生が植えてありました。その芝生も40センチくらいを四角に掘って、束にして学校へ持って行きました。飛行場へ植えるためだったようです。また冬には、高梁川を船で渡り、^{はちまん}八幡山にある松の木を運びました。2メートル位に切った松の木を1人3本位担いで降りてくるのですが、松の木から油を採るのだと聞きました。また中洲小学校の校庭の周りは、^{ごう}防空壕を作っていました。警戒警報が鳴り出したら、皆その穴の中に隠れていました。ウーと鳴ったら警戒警報で、ウーウーウーと鳴ったら空襲警報です。皆その^{ごう}防空壕の中に入ったら、いつB29が飛んで来るかわからないので話もできません。その^{ごう}防空壕も皆町内の人や家の父母たちが来て、穴を掘りその周りに^う畳を敷いて、その上に畳を乗せて土をかけて丈夫に作ってくれました。日数が過ぎるとその^う畳の中から草が生えてきて、異様な臭いがしてくるようになりました。子どもたちは頑張りました。あの頃は運動場全部が芋畑でした。空襲が激しくなると、私たちは机と椅子を運んで、各町内のお寺やお宮で勉強をしました。でも、^{せみ}蝉の声を聞きながらの勉強も楽しかったと思います。体操の時間は^{なぎなた}薙刀の練習があり、敵が攻めて来たらこれで突きなさいと教えられました。昭和20年6月、水

島に空襲がありました。私たちはその時学校へ行く途中だったのですが、私たちは皆すぐ家に急いで帰り、爆弾の落ちるのを目の前で見ました。その時、大勢の死者や重傷者が出たりしたとは知りませんでした。あの頃はシンガポールからと言って、ゴム製品を色々と学校へ送ってくれました。ボール、消しゴム、運動靴等色々あ



りましたが、どれもくじ引きで、なかなか皆には渡らなかったと思います。あの頃は靴等履いている人はおらず、藁^{わら}で作った草履でした。それも遠いところから来る人はボロボロになってしまうので2日も履くことは出来ず、素足で学校に行きました。昭和20年8月15日は暑い日でした。子どもたちは酒津の池で泳いでいましたが、その時誰かが「戦争に負けたのですぐ帰ろう。アメリカ兵が来る。」と大声で言ったので皆すぐ家に帰りました。その途中、「アメリカ兵が来たら殺される。」と言ったので、私は本当にその言葉を信じていました。死ぬ覚悟でした。その後、倉敷にもアメリカ兵の駐屯地が出来て、いつもジープに乗った兵隊さんがいっぱい来ました。ターバンを巻いた人、真っ黒い顔の人が乗ったジープが何台も何台も続いて通りました。その人たちは子どもたちにチョコレートやガムをくれました。アメリカ兵も日本の子どもが可哀想に見えたのでしょう。時々友達と会ったらこんな話もしていましたが、80歳を過ぎるとその人たちもいなくなり、話すこともなくなりましたが、このような事があったことを後世の人に知ってもらいたくて、思い出しながら書かせてもらいました。先日も中洲^す小学校の校庭に立って、昔を思い出して来ました。

戦時下の大原美術館

赤木徹志さん

大原美術館での思い出である。現在と同じように正面に小さな木造の門があった。扉は開いたままである。当時は一日に、おそらく一人の入館者もない日があったのではなからうか。

昼下がり、^{せみ}蝉取りの網を持って中庭に入った遊び仲間が入り口をのぞく。中にはいつもなら、老婦人が入場料と引き換えにスリッパを渡しているはずだが、その日は誰もいない。一人が入りだすと、頭の黒いネズミ共は一列になって階段をあがった。はだしのまま両手にゴム草履を下げてゾロゾロと。



二階の広間に出ると、少しばかり日常とは違う雰囲気⁽¹⁾に、みな神妙にしまわりの壁に取り付けられた額^{まわ}の絵を見廻す。どの絵を見ても、学校の図画室にある絵とは全然違う。人物はみな外人ばかりである。

景色は書いてあるがボヤッとして霧に包まれた様な絵。桁外れに大きな絵。ああ、これが美術館か。一同キョトンとしたまま声はない。要するに、猫に小判ならず、ネズミ共に小判の1日であった。

当時、この美術館で特異な出来事があった。確か、ある夏の正午ごろのことである。爆音とともに東の空から鶴形山の上空に向かって飛行機が飛んで来た。見上げるとオレンジ色の機体で、軍の練習機であることはすぐわかった。通称赤トンボといわれた⁽²⁾複葉機である

その飛行機の爆音が、鶴形山の中央付近で急にせき込みはじめ、音が止まると同時に機首を下げて急降下しながら機影が山の向こうに消えた。間違いない。飛行機の墜落だ。

私はトンネルを目指して走り、見当をつけた美術館あたりまで走ってきた。ふと見ると、美術館の中庭にある松の一本に白い落下傘⁽³⁾が頂上あたりから下へダラリと垂れ下がっており、塀に隠れて下半分は見えない。恐らくは操縦士がその下にはいたのだろうがあまりに低い高度からの脱出で傘が十分開かなかったのではなかろうか。想像もしない悲痛なできごとであった。

驚いた事に、通用門では早くも駆けつけた憲兵が美術館への立ち入りを禁止していた。警官よりも早くである。色々な突発事件⁽⁴⁾で、こんなに早い対応を私は見たことがない。それにしても、飛行機の機体は何処に落ちたのか。その後、うわさすら聞くことが無かった戦時下の情報統制⁽⁵⁾のすごさである。

太平洋戦争の前、美観地区の掘割⁽⁶⁾に木造の屋形船⁽⁷⁾がつながれていた。

広島から、瀬戸内海を通り児島湾に入り、倉敷川の河口から遡上してきた船である。全長は20mはあろうか結構大型の船で屋形のなかは料亭の造りである。毎年冬にやってくる牡蠣船^{かき}だった。

中橋の上手で南側道路に寄せて停泊していた。乗り降りには、30センチ幅のバタ板⁽⁸⁾を渡ることになる。おそろおそろ両親につれられて食事に入った記憶がある。いま考えてみても、この掘割には結構大型の船がはいってきていたものである。河口から倉敷川にはたくさんの橋があるが、これを通過するために船は帆柱を倒して入ってきた。大型の船が入れたのは、川底も昔のほうが深かったのではないかと思う。

倉紡工場に原綿を運ぶ通路の川岸には、石段と傾斜でできた荷上場があった。船で運ばれた原綿⁽⁹⁾は、長さが1メートル程度で断面が50センチ角の麻布(ドンゴロス)で巻かれ、鉄のバンドが両側にはまっていた。

重そうな塊である。これを船にある起重機⁽¹⁰⁾のマストで釣り上げて、傾斜場で待つ大八⁽¹¹⁾車の荷台に下ろす。

3 ~ 4 個積み込むと、背丈は低いが筋力はけた外れの仲仕が⁽¹²⁾ながし、ガラガラと音をたてて引き始める。斜面を上がるまでは荷台の後ろから仲間が押す。石畳は真っ直ぐ倉紡工場の門内まで続いている。いまでもこの道路には荷車に合わせたレール型に石が敷き詰められたまま残っているのが見られる。

この⁽¹³⁾かいわい界隈で、いまでも記憶にあるのは前神の交番である。橋の南西の隅にガラス戸の多い平屋の交番所があった。

日中戦争当時、南京が⁽¹⁴⁾陥落したとき、夕方から⁽¹⁵⁾提灯行列が開かれた。その行列の解散地点がこの交番前だったと記憶する。

スタートは駅前広場で、元町を通ったか、^{えびす}戎町商店街を通ったかいずれにしても美術館前の掘割を⁽¹⁶⁾通ってゾロゾロ進むことになる。

全員丸い提灯を提げ「南京陥落万歳」を叫びながら歩くのである。

南京がどこやら、陥落が何の意味やら分からないまま歩いた記憶があるが、考えてみれば80年近くたった今、南京陥落の影に起こった⁽¹⁶⁾虐殺事件が、いまだに論争の種になることを予測した大人は、当時誰ひとりいなかったらう。

-
- 1 神妙... 普段とは違って、おとなしくすること。
 - 2 複葉機... 上下に二葉以上の主翼を有する飛行機。
 - 3 落下傘... パラシュート。布製の大きな半球形の傘の空気抵抗により、人や物を安全に落下させる装置。
 - 4 突発... 突然に起こること。
 - 5 情報統制... 国家等の公権力が、出版物や言論を検査し、不都合と判断したものを取り締まる行為。
 - 6 掘割... 地面を掘ってつくった水路。ほり。
 - 7 屋形船... 家の形をした覆いを据え付けた船。
 - 8 バタ板... 足場を作るために設置された板。
 - 9 原綿... 紡績の原料として使用するため、綿繰り車にかけて種を取り去っただけの綿花。
 - 10 起重機... 重量物を吊り上げて、水平または垂直方向へ移動させる機械。クレーン。
 - 11 大八車... 荷物運搬用の二輪車で、2、3人で引く大型のもの。
 - 12 仲仕... 港や河川で、船の貨物の上げ下ろし作業に従事する人。
 - 13 界隈... そのあたり一帯。付近。近辺。
 - 14 陥落... 攻め落とされること。

- 15 提灯行列...戦勝や各種の祝いごとなどの際に、祝意を表すために、夜間、たくさんの人々が火をともした提灯を持って、列を組んで街路をねり歩く行事。
- 16 虐殺...むごたらしい方法で殺すこと。

航空機工場と航空基地建設の実態

アジア・太平洋戦争下 水島軍事機密史料集復刻

小川 薫 さん

はじめに

私は、昭和5年(1930)12月26日、旧岡山県川上郡宇治村笹尾^{ささ}2480番地(現高梁市^{はし}宇治町)(当時は12世帯、現在6世帯)の農業兼大工・小川熊次郎の次男に生まれた。

戦争への道

⁽¹⁾時局は戦争へと向かっていた。思いつくままに記してみる。

昭和12年1月7日、日本は中国に全面的な戦争を仕掛けていった。いわゆる支那事变の開戦である。

昭和12年9月、陸・海軍は国民に対して、「拳国一致⁽²⁾」のビラを発行し、日本は負けを知らない神風の国、天皇陛下のために命を^{ささ}捧げよと、国民の気持ちを⁽³⁾昂揚し、⁽⁴⁾士気の高揚を計った。

対米英宣戦の大詔⁽⁵⁾発行は、昭和16年12月8日、午前11時45分のことである。いよいよこの刻に大東亜戦争に突入したのであった。

それまでの尋常小学校・高等科は昭和16年4月から「国民学校初等科・高等科」と改められた。ナチス・ドイツのフォルクスシューレにならって名付けられ、「皇国ノ道⁽⁶⁾ニ則リテ初等科普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的⁽⁷⁾錬成ヲ為ス」ことを目的として発足したものである。

学徒動員へ

食糧増産計画の下、建国した⁽⁸⁾満州には広大な土地があったが、成人は軍人として必要なため、開拓のために人数が不足していて、国民学校高等科生にも募集の範囲が広げられ、田舎の農家の次男ということで、⁽⁹⁾満蒙青少年開拓義勇団に行くようにと説教された

が、私は応じず、満州には渡らなかった。

しばらくして、戦局は悪化の道をたどり、大本営のラジオ放送も敗色の色を漂わせるようになり、⁽¹⁰⁾富国強兵・⁽¹¹⁾鬼畜米英・大東亜共栄圏とラジオ・新聞で報道され、⁽¹²⁾国賊・⁽¹³⁾非国民と呼ばれ、憲兵に連行されるよりはマシ、と三菱重工業航空機製作所へ学徒動員としておもむき赴いた。

配属されたのは、航空機製作所第二組立工場であった。第一組立は胴体の骨格を組み立て、我が第二組み立ては胴体の骨格へ外板の⁽¹⁴⁾ジュラルミン板の⁽¹⁵⁾鋸打ち、翼や脚の取り付けで、担当部は操縦士の席の上の天蓋の取り付けであった。第三組み立ては配線や機器の取り付けで、飛行機完成の形に仕上がっていた。水島では、昭和18年4月から大空襲までに一式陸上攻撃機513機を造った。

昭和20年6月22日午前8時36分、米軍B29爆撃機110機による大空襲で焼け野原となった。

その後は、連島の山の北、竜の口に半ドーム型の建屋で戦闘機紫電改9機を造った。

8月15日、前夜から正午に重大放送があると聞いていてラジオに耳を傾けたが「忍びがたきを忍び、耐えがたきを耐え・・・」のところが雑音混じりで聞き取れただけで何がなんだか、周りの人の話で「戦争は終わったらしい。」と知った。

「ついにこの日が来たのか・・・」これで田舎に帰れば麦でも芋でも腹いっぱい食べられるというのが実感であった。(その時15歳)

支那事変は、当初、軍は1年ほどで勝利すると豪語したものの、重慶の奥地まで進撃したころには兵隊の人数・戦車・弾丸・食糧・医薬品・看護士など後方支援が不足していた。

内地は食糧増産で、農地に工場は立てられず、昭和16年6月、海軍は水島の埋立てを決定した(軍・三菱重工業・岡山県の三者)。

旧高梁川の⁽¹⁶⁾廃川地を福利厚生施設、養成工場、⁽¹⁷⁾宿舎、社宅、浴場などに利用、有史以来の⁽¹⁸⁾高梁川河口沖に⁽¹⁹⁾堆積した砂を持って陸地の造成、広大な工場計画が行われた。緊迫し

た世相⁽²⁰⁾で、内容は秘密で誰も知らされずに。

平成24年、京都の古書目録に「水島戦時中極秘文書」を見て、即刻得意先の書店にFAXで購入を申し入れた。倉敷・高松・山口・亀島山トンネル研究会などから問い合わせがあったが、「一見⁽²¹⁾の」京都の風習から私が購入できた。元山陽学園大学教授太田健一先生は終戦時に焼却処分されたはず、よくぞ残り倉敷へ帰って来たものだと、監修をご担当くださった。

軍極秘は、昭和13年2月から14件

丸秘文書は、昭和16年6月27日付1件

極秘文書は、昭和16年8月7日から14件

終戦までに 親展を含み40件を収録している。

昭和という時代が遠くなりつつあり、戦後70年という節目の年になった。

倉敷市において、昭和16年6月に海軍による海面の埋立て、軍極秘文書には、誰が命令し、どのように建設されたか、実名と押印がある。のべ350万人という兵士は赤紙⁽²²⁾1枚で召集され命を落とした。誠に無念、^{あわ}憐れのほかない。

水島を、航空機製造を、戦争を⁽²³⁾風化させないために子々孫々まで「真実」を伝えたい。これが、私に課せられた⁽²⁴⁾天命だと考えている。

-
- 1 時局...時世のありさま。そのときの世の中の状態。
 - 2 拳国一致...国全体が一つの目的にむかって同一の態度をとること。
 - 3 昂揚・高揚...精神や気分が高まること。また、高めること。
 - 4 士気...集団や兵士の意気込み。
 - 5 大詔...天皇が広く国民に告げる言葉。詔勅。
 - 6 皇国...天皇が統治する国。
 - 7 錬成...鍛えて立派にすること。
 - 8 満州...日本が満州事変によって占領した中国東北部に作りあげた国家。1932年、もと清朝の宣統帝溥儀を執政に迎え、中華民国から分離させて建国。1945年8月、日本の敗戦とともに消滅。
 - 9 満蒙青年開拓義勇団...満州事変以降、日本から中国東北部へ送り出された農業移民団。満州国維持の軍事目的と国内農村窮乏の緩和を目的として、総勢三十万人以上に達したが、ソ連参戦により潰滅。多大の犠牲者を出し、また中国残留孤児を生んだ。

- 10 富国強兵...国を豊かにし兵力を増強すること。国の経済力・軍事力を高めること。
- 11 大東亜共栄圏...欧米諸国の植民地支配から東アジア・東南アジアを解放し、東アジア・東南アジアに日本を盟主とする共存共栄の新たな国家秩序建設を目指した、第二次世界大戦における日本の構想。
- 12 国賊...国の利益を害する者。国家に害を与える者。
- 13 非国民...国民としての本分・義務に反する行為をする者。特に、第二次世界大戦時に、軍や国策に非協力的な者を非難する語として用いられた。
- 14 ジュラルミン...アルミニウムに銅・マグネシウム・マンガン・ケイ素などを混ぜた合金。軽量で強度が大きいため、飛行機・建築などの材料にする。
- 15 鋳打ち...穴を開けた部材を接合するために、鋳（リベット）を打ち込んでしめるけること。
- 16 廃川地...蛇行した河川の直線化や、洪水防止のために幅の広い放水路の開削を行った場合に廃止される従来の河川の敷地。
- 17 福利厚生...企業が労働力の確保・定着、勤労意欲・能率の向上などの効果を期待して、従業員とその家族に対して提供する各種の施策・制度。主として従業員の生活向上を支援する目的で実施される。
- 18 有史以来...人間が歴史を記録し始めてから今まで。
- 19 堆積...積み重なること。
- 20 世相...世の中のありさま。社会のようす。
- 21 一見...初めて会うこと。京都では、お店に何らの面識なく、初めて訪れた人は入店を断られることがある。
- 22 赤紙...召集令状（在郷軍人などに対し、実際の軍務につくことを命じる書状）のこと。
- 23 風化...ある出来事の生々しい記憶や印象が、年月を経るに従い、次第に薄れていくこと。
- 24 天命...天から与えられた使命。

戦中戦後の体験記

金光育子さん

昭和16年6月、私が小四の時、海軍軍人だった父が乗っている軍艦が、横須賀港から出港するので、母と小高い丘の上から、東京湾を南下する艦を見送った。今、思うと母の気持ちは如何ばかりだったかと思う。

その年の12月、太平洋戦争が始まり、私が「お父さんは？」と聞くと、母は「太平洋のどこかにいらっしゃるでしょう」と言っていた。日本は、南アジア方面に進み、17年2月にはシンガポールを陥し、父が市中行進している写真が新聞にのり、びっくりした。と同時に父の元気な姿が見れて嬉しかった。

間もなく、「東京勤務になったよ。」と言って、父が突然帰ってきた18年10月、明治神宮外苑えんで学徒出陣壮行会(1)があり、父も、見送ったそうだ。多くの有望な青年を失う事になり、日本は大きな損失だったと思う。

それから父が、呉に転勤し、私も呉の女学校に転校した。その後、日本の戦況が次第に悪化し、20年7月に呉市街も、軍港も爆撃され、学校も全焼した。自宅は天應(2)なので、汽車通学で毎日、学校に焼け跡の片付けに行っていた。

ある日、通学途中、米軍の来襲で汽車は止り、私達は、汽車から飛び降りて物影に入ろうとした時、もう米機が頭上におり、私が見た時、ごっついメガネをかけた操縦士と目が合った様な気がした。やられると思った時、飛行機はよその方に飛んで行き、汽車が「ポー」と鳴ったので、友達を見ると倒れているので、駆け寄ったら「私、死んだふりしてたの。」と呑気な事を言って、「お互い命あったね。」と言いながら急いで汽車によじ登り、座席に着いたら、お弁当がなくなっていた。そのまま学校に行き、作業をしてくたくたになり帰宅した。何故、あの米機は機銃掃射しなかったのだろうか、今も時々思う。

翌日から母がザルに芋や南瓜かぼちゃを入れてくれた。どこに行くにも大事に持ち歩いた。も

う食料事情も非常に悪くなった。

その後、学徒動員で、兵隊さんのパン作りに行く事になった。毎、朝礼後、軍のトラックが迎えに来て山の方のパン工場で、小豆の石取りをさせられた。毎日暑い、薄暗い、山の横穴の中での作業は、頭がボーンと変になりそうだった。

ところが、8月6日朝礼の時、空がピカリと光り、後方で大音がして、その後B29だったろうか、私達の頭上を悠然と南の空に飛んで行った。後で、広島に原爆が投下されたと知った。その日は、パン工場のトラックは、広島に行ったそうで、私達を迎えに来なかった。先生が「今日は状勢が悪いから帰りなさい。」と言われ帰宅した。

家に母は留守で、余りに暑いので、近くの海に友人と泳ぎに行った。今考えると、広島湾には、沢山の放射能が浮いていただろうにと思う。先生が危険だから帰宅する様に言われたのに、何て事をしたのだろうかと思う。海で夕方まで遊び帰宅すると、母は、婦人会から、近くの小学校講堂に次々と運ばれて来る広島の負傷者の看護に当たっていたそうだが「薬もなく、うちわであおいで、水を飲ましてあげることしか出来なかった」と、くやしそうに言っていた。私も小学校に行って見たけど、皆さん痛い々と言いながら、1人、2人と亡くなっていった。

あの光景は、何とも言えませんでした。

そして8月15日昼、呉駅前広場に正座して、終戦の玉音を聞いた。色々な思いが、折り重なって、そこにいた人、皆で泣いた。

間もなく、私在家にいた時「ハロー」と言って、米兵が窓から覗いた^{のぞ}ので、それは驚いた。終戦すぐ米艦が呉港に来たらしい。

9月、⁽³⁾枕崎台風が来て、3日3晩雨が降り続き、17日夜、就寝中に水と土砂が家に入りこみ、私は蚊帳から出られず、このまま流されるのではと⁽⁴⁾思っていたら、父が蚊帳をはずしてくれて助かった。

家は住む事も出来ず、近所の人、数軒で、家も家財道具も捨てて、舟で水島港まで来た。その時、南畝の方が親切に、ゴザや、おにぎり持って来て下さり、本当に有難かつ

た。この御恩は、一生忘れません。私達は、水島に住まい、私は倉敷の女学校（今の青陵高）に転校した。通学途中、美観地区を通る度、今まで軍港の町で育った私は、日本にもこんな落ちついた静かな町があるのかと思った。両親にも倉敷ですっと暮らしたい、お友達もいいし、もう転校はしたくないと言った。

父も倉敷で仕事をする様になり、ずっと、この地でおだやかに暮し94才で旅立った。

戦争は、なんの恩恵もなく、人類に多大の犠牲を与え、不幸をもたらす事になるだけだと思ふ。世界中が平和で、人々が安心して暮せる様にと祈り、私も神様から頂いたこの命を大切に生きていきたい、と思っています。

-
- 1 学徒出陣...第二次世界大戦末期の1943年以降、兵力不足を補うため、それまで26歳までの大学生に認められていた徴兵猶予を文化系学生については停止して、20歳以上の学生を入隊、出征させたこと。
 - 2 天応。呉市の地名。
 - 3 枕崎台風...1945年9月に日本を縦断した台風で、室戸台風、伊勢湾台風と並んで昭和の三大台風の一つに数えられる。終戦直後のことであり、気象情報が少なく防災体制も不十分であったため、各地で大きな被害が発生した。特に広島県では、死者・行方不明者合わせて2,000人を超えるなど甚大な被害となった。
 - 4 蚊帳...夏の夜、蚊や害虫を防ぐため、四隅を吊って寝床を覆う道具。

4 從軍體驗

樺太（サハリン）

小林市雄さん

私は東京生まれ樺太^{からふと}育ち。大正15年6月、大工職で先に渡樺した父の後を追って、母に連れられて大泊⁽¹⁾から落合⁽¹⁾まで行って、ポンポン発動機船⁽²⁾で知取町⁽¹⁾に着いたが、港と言ってもまた浮橋に乗って上陸するが、すっかり船酔いし母子共に上陸板からザンブリ海上へ。6月で寒いかどうか忘れたが、お菓子のはいった白い柳行李^{やなぎこうり}と白い帽子が浮かんでいたのが、今でもはっきりと頭に残っている。

知取町^{しるとる}は、王子製紙工場が豊富な製紙原料の松を使って、新聞用紙を製造していた。⁽¹⁾敷香^{しすか}、知取^{しるとる}、豊原^{とよはら}、真岡^{まおか}に工場があった。

知取川^{しるとる}でも、奥地で伐採した松を水流を使って工場まで流す。冬に切った松を上流に組んでおいて春先の氷がとける頃、人夫が命がけで組んだ木の一部をはずすと、12尺から20尺の松の木が縦になり横になり物凄い状況で流れ下る、天下の絶景であった。この川は春になると、鮭^{さけ}、鱒^{ます}が川を真っ黒になって登ってくる。すると人々は長い竹の先にクサリ状の針金を上流から下流に下って引くと面白いように魚が引っかかってくる。

筋子^{しんこ}といって朝捕った卵を醤油^{しょうゆ}に漬けて晩に食べると、こんなにうまい物はない。身は、すぐ食べますが、野菜と漬けて冬の副食となる。これは密漁であるから時々警官が数人取り締まりにやってくる。捕まると、ぶんぐら⁽³⁾れ一晩ブタ箱入りとなる。

夏になると冷たい川でも泳ぐ人が居たが、時々心臓マヒかなんかで死ぬ人もでる。また、町は10月頃から雪が降り、根雪⁽⁴⁾になるのは12月26日頃になる。この頃になる



と、あちこちペタン、ペタンと餅をつく音が聞こえてくる。で、つき終わったら、すぐ外に出しておくのと凍って夕方取り入れると凍り餅となり、火にあぶると、つきたてのようになりうまい。この頃になると猛吹雪となり、一寸先も見えなくなり、通勤で隣りを歩く人が急に見えなくなる。仲間と一緒に探しても見つからない。春に雪がとけてくると溝の中から見つかる。樺太最北の(オハ)には半官・半民の石油工場があった。⁽⁵⁾
21歳になったら青年訓練所で兵隊訓練を受け帰隊中、市役所の職員が召集令状(赤紙)を持ってきて手渡してくれた(宗谷要塞重砲兵連隊に入隊せよ宿泊地は菅野旅館とす)⁽⁶⁾⁽⁷⁾^{かんの}
(北海道稚内)。隣りに連隊本部があった。すぐに入隊、そこに自分の名前を書いた兵装があった。昔の砲兵は大きな人ばかりだったか、皆ダブダブ帽子、あげあげズボンを引きづって、8里の行軍つらかった。

遂に第二中隊のある宗谷岬についた。早速訓練が始まる。番号と号令がかかる。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7...と終わったらぶんなぐられた。お前らそんなに死にたいか、死地に行きたいかと。何の事かさっぱり判らない。4はヨシ、7はナナと呼ぶのは後で判ったが、叩かれ痛い思いで覚えたのを忘れない。^た

かくて終戦となり、中隊命令により樺太出身兵17名だけ、古兵さんの車に乗りこんだが目的地の本斗まで行かず途中でおろされ、豊原まで歩いた。日本海方面に帰った兵15人は、東部から攻めてきたソ連兵に皆殺しになった。運命の差は紙一重。

これが判ったのは10数年後、年金について調査のため内閣府に行って、調査の結果判った。私が樺太から引揚げたのは、昭和23年6月である。資料は何もない。大泊でソ連兵により日本人の物は全部差し押さえられた。

-
- 1 大泊・落合・知取・敷香・豊原・真岡・本斗...日本の領地下において樺太に存在した町。
 - 2 ポンポン発動船...炎玉エンジンを搭載した小型動力船。リズムカルな独特の爆音を立てて航行することから「ポンポン船」と呼ばれた。
 - 3 ブタ箱...夏の夜、蚊や害虫を防ぐため、四隅を吊って寝床を覆う道具。
 - 4 根雪...雪解けの時期まで残る積雪下方の雪。
 - 5 半官・半民...政府と民間とが共同で出資し、事業を営むこと。
 - 6 要塞...戦略上の重要地点に設けられる、主に防衛を目的とした軍事施設。

- 7 重砲兵...長距離の射撃が可能な口径の大きい大砲で敵を砲撃するのが任務とする兵。
- 8 古兵...古くからいる現役の兵士。

飛行第 5 5 戦隊

前 田 勝 美 さん

戦争も終わりに近づいた昭和 2 0 年 3 月 , 我が整備隊は三重県の明野飛行場より第六航空軍に転属の命令を受け , 福岡へ行くと更に配属先が鹿児島島の飛行第 5 5 戦隊と決まり , 列車で知覧の飛行場に着いたが , そこには戦隊はいなかった。

幸いに憲兵隊があり尋ねると , 川辺郡の万世町 (現南さつま市) に飛行場 (当時軍の機密飛行場) があることが分かり⁽¹⁾ 軽便鉄道で移動したが , 整備隊は数人に分かれての民宿で飛行場へ往復していた。格納庫は爆撃でなくなり , 滑走路の先に堤防が有って外は海だった。この堤防がのちに悲劇を起こすことになる。ある朝 , 飛行場に行くと , 海軍の一式陸上攻撃機が不時着しており , 乗員はおらずそばに小便の入った⁽²⁾ 一升瓶が転がっていた。

この「一式陸攻」が水島で作られた事は戦後復員して分かった。またある時 , 米国製の「ポートシコルスキー」戦闘機が , オイルを機体に流しまっ黒になり , 滑走路沖の海岸に不時着して乗員が逃げる



所を逮捕したこともあった。またまたある日は , 我が戦闘機 (三式戦闘機キ 6 1 飛燕^{ひえん}) が次々と離陸している時 , 1 機が堤防に接触し火を吹いたので乗員を助けようと近づくと , 弾倉に火が移り 2 0 ミリの機関砲弾 (2 0 ミリ以下は銃と言った) が四方に飛び近づけなかった。

戦況ははげしく , 全国の古い機体や満州にあった練習機も特攻用に爆装 (無線機 , 機銃を下し 5 0 キロ爆弾を吊る^つ) して出て行った。我が 5 5 戦隊は特攻機を援護して沖縄

まで送るのが任務だった。夜は小学校で映画を町の人と見た。また、町長さんの家でバケツ⁽³⁾ぱい芋飴^{もら}を買ったことも。ガソリンが無いので動かなかったダットサントラックも飛行場通いになった。

薩^{さつ}摩^まに少しは馴^なれた頃、沖縄戦が終わり、我が55戦隊は元の小牧飛行場(名古屋)へ引揚げたが、終戦を前に最後の移動で大阪の泉佐野飛行場(現関西空港の入口)へ行き、戦は終わった。全機プロペラを下し車輪を外して復員の日を待つ事になる。



鹿児島弁を披露しよう

「おまんさーわ、がつついよかにせど。」

(あんたはぼっけえ男前じゃのう。)

-
- 1 軽便鉄道...軌道が狭小で、小型の機関車・車両を使用する鉄道。明治43年から大正8年まで、鉄道敷設法によらないで建設された鉄道。
 - 2 一升瓶...酒などの液体が一升(約1.8リットル)入るびん。
 - 3 芋飴...蒸したサツマイモを原料として、麦芽などを加えて煮詰めて作った褐色の飴。

戦車兵

富岡 喜美子 さん

⁽¹⁾徴兵検査で近衛兵に選ばれた彼は、「近衛兵なのでは、なまぬるい」と志願して戦車兵になりました。

戦後40何年も経って調べた結果「戦車第二師団第六連隊」とわかりました。戦中は部隊名など兵士の家族には全然わかっていませんでした。

昭和19年1月に大阪に入隊、1週間後満州勃利^{ぼつり}へ。8月12日勃利出発、8月30日釜山出発、9月10日門司港出発、それからの途中では、アメリカ潜水艦の攻撃に悩まされながら、無事に9月30日ルソン島に上陸、各地を転戦、20年1月末「戦車第六連隊は犠牲となってムニオスの町を死守せよ」との師団命令により、何日間かムニオスにとどまって、米軍の包囲による猛爆を受けながら戦っていました。

ルソン島に上陸した米軍の進路を阻み、日本の軍隊や、一般邦人達の退路⁽²⁾を確保する為の防御



陣地としてのムニオスにおける戦車第六連隊に対し、優勢な米軍の爆撃は凄まじいものであったそうです。

連日黒煙の上るムニオス方面を見ていた友軍の兵士たちは、「あの黒煙の下で戦車第六連隊は、果たして存在するであろうか」と祈りながら見ていたのだそうです。

その後20年2月6日「敵の包囲を突破して5号国道を北上せよ」と命令変更になり、戦車をすぐ移動できるように準備しようとしても、連日の爆撃により戦車のキャタピラは土に埋もれた状態になっていて、非常に困難を極めたとのこと。7日未明に出発した

ところ待ち構えていた米軍によって、戦車は全部擱座⁽³⁾、生き残った兵は徒歩で脱出したのだそうです。

ちなみに戦車第六連隊は総員 908 名で生還者 56 名、戦死者 852 名のうち、ムニオス脱出のとき実に 344 名の戦死者が出たそうです。戦車兵の彼もその時戦死ということになっています。

戦車第六連隊の防御戦闘は「世界でも稀な戦例と言える」と図書館で読んだ本にも書かれていました。またムニオス脱出後、大変な御苦勞ののち生還された方より送られた資料によりますと、陸上自衛隊富士学校の教科書のコピーにも、その時のムニオスにおける戦車第六連隊の守備戦闘の内容が、日付け入りで 23 ページにわたり詳しく書かれていました。

南方で戦死された人の最後の様子は、一般の人はほとんど何もわかりませんので、戦車兵のお父さんは戦後、息子の戦死の状況が知りたくて、引揚援護局へ足繁く通い「またあなたですか」と言われながら、いくらたずねても結局何もわからなかったと聞きました。そのお父さんは、毎年欠かさず春の靖国神社大祭におまいりされていましたが、79 歳のとき「来年からはもうよう来ないからネ」と言って帰られたと聞きましたので、私が調べてみようと思いました。

新聞記事などでルソン島から生還された人のことが載っているのを手がかりに、次々とおたずねして終に戦車第六連隊の上官の人が、神戸市にお住まいで、軍の資料など整理されていることを知ることができました。戦後、40 年以上経っていましたが、その方と何度もお便りを交わし、数々の資料も送っていただきました。

お父さんは息子が大阪へ入隊の時、門まで送って行かれたと聞きましたので、それからのことを詳しく手紙に書き、ムニオス脱出のときの隊列のことまで、長い長いお手紙を書きました。私の書いた長い長いお便りを読まれたお父さんは、その手紙を家族にも見せないで、1 人で燃やされたそうです。後日家族の方のお話しで察することができました。それからのちにお父さんは亡くなられたことを知りましたが、私の手紙がお父さ

んを死なせる結果になったのでは・・・と、今も気になっています。

この文章を書きました「私」は「生まれたときからいいはずけ」でありまして、現在
89歳、数え年で90歳になります。

-
- 1 徴兵検査...一定の年齢に達した者に対し、兵役に服する資質の有無を判定するために身体・身上を検査すること。
 - 2 退路...逃げ道。
 - 3 擱座...戦車などが壊れて動かなくなること
 - 4 引揚援護局...内地(樺太・沖縄・千島を除く)以外の地域から内地に引き揚げる者などに対し、応急保護や検疫などを実施するために設置された事務所。
 - 5 春の靖国神社大祭...靖国神社(国家のために尊い命を捧げられた人々の御霊を慰め、その事績を永く後世に伝えることを目的に創建された神社)で行われる春季例大祭(神霊を慰め、平和な世の実現を祈る)のこと。

城外実戦体験

田 辺 康 市 さん

昭和19年11月初旬、岡山第10連隊に入隊し、中国の高平にある壘^{るい}第1477部隊独立歩兵第246大隊第三中隊に入隊した。

約2か月ぐらいの過酷な現地教育を受けて、初めて⁽¹⁾討伐と言う名目で、情報に基づいて敵地区とされる地域の集落に、
糧⁽²⁾ 秣^{りょうまつ} 収集も兼ねて中隊長を先頭に出発した。自分は⁽³⁾軽機関銃を持って射手として参加する。1時間ぐらい山から谷へと歩いて行くが、幅5メートルほどの1本の道路が何キロも^{はる}遙か彼方の先までズーと見渡せる場所に来たとき、



日本ではこんな風景は全く見られない、中国は大きな国だなと感じた。と同時にこの壮大な距離を歩いて行けるのだろうか、不安な気持ちになった。でも戦友も皆一緒に行くんだから自分も行かなければ、と隊列に引きずられるように顎を前に出しながらついて行く。^{しばら}暫く行くと上官が「あッ、⁽⁴⁾狼煙⁽⁵⁾が上がっているぞ気を付けろよッ。」と指さす方向を見ると、1キロほど離れた右横の小山の頂上あたりから不気味な白煙が信号用として波打つような形で上っている。と左側の小山の頂上からもそれに答えるかのよう^{のろし}に狼煙が上がった。我々の行動を察しての作戦信号なのか。と思った瞬間、両側の山の中腹あたりからパンパンと銃声が聞こえ攻撃してきた。挟み撃ちだ。部隊は直ちに応戦した。自分は上官の「軽機前エー」との命令で10メートルほどの前方の凹地に走り込み、上官の指示に従って激射した。初めての戦闘だ。機関銃の連射は体中にももの凄く響く。興奮して無我夢中だ。相手を殺さなければ自分が殺される。これが戦争だ。機関銃

を発射している場所は敵にはよく判るので集中的に狙われやすい。当然自分の近辺には無数の弾が飛んで来る。とその時、右耳の辺りが「ビシッ」と言う音がして、顔面の右半分が何かで殴られ麻痺した状態になった。当然撃たれたと思い「やられたッ」と言って手で右の顔を押さえて倒れた。傍にいた上官が「何処をやられたッ」と言って抱き起し、顔を押さえている手を取って見て「馬鹿野郎」と力いっぱいぶん殴られた。「起きて早く撃てッ、この馬鹿者がッ。」「ハイッ」と答えて飛び起きて射撃を始めた(至近弾を受けると弾風の圧力で鼓膜が一時的に損傷し、頭半分に麻痺感が出ることもある)。間もなく敵の銃声は止んだ。時々銃声はするが弾は来なくなった。先発隊が銃声に気づき両側面から攻撃を仕掛けたらしい(先発隊とは斥候兵として、討伐に行く目的地に秘かに先行して敵の様子を探る兵隊)「撃ち方やめ」、「前進」との号令で先発隊と合流して敵の後を追ったが、もう攻撃してくる気配は無いので追跡を止め帰ることにした。ところが帰りだすと、何処にかくれていたのか集落や物陰からパンパンと言う銃声とラッパやドラ、太鼓の鳴り物入りで「ドンドン、パイパイ、ジャンジャン、パンパン」と、何百人が追ってくるのか想像がつかないほど強烈な音響を出して追ってくる。自分たちは初めての事なので何が何だかわからない。もう上官の側を離れず、命令に従って行動する以外は何もない。上官の命令で中隊は2分隊に別れ、1分隊は追ってくる敵を迎え撃ち、1分隊は100メートルほど後退して立ち止まり、援護射撃をしながら後方の味方を後退さすという作戦を繰り返し行って、ようやく安全な地域まで帰ってきた。そしてある集落で休憩した。何人が負傷兵がいたようだ。衛生兵が忙しそうに走り回っていた。自分はのどが渴いてカラカラだ。水筒の水も無いので水を貰いに民家



に入って老夫婦が居たので中国語で「リヤンスイ、シンジョー（水をください）。」と言ってみた。通じたのか笑顔で^{うなず}頷いて部屋の隅にある大きな^{みずかめ}水甕を指差した。「シエーシエー（ありがとう）。」と言って、そこにあった^{ひしゃく}柄杓で^{かめ}甕の水を^く汲み上げると白く濁った水の中をポーフラが2、3匹浮き沈みしている。が、そんな事を気にしている場合では無い。早く水が飲みたいので⁽¹⁰⁾ポーフラが底に沈んだ時を見計らって、上の方だけ2、3口飲んだ。またこの付近の水は石灰が多く含まれていて生水を飲むとすぐ下痢をする。それを覚悟で飲むのだ。沸かして飲む時間は無いのだ。古兵たちはその間に牛や豚、鶏とか穀物等^{りょうまつ}糧秣収集してきた。そして隊列を組んで中隊へと帰路につく。途中、案の定自分は下腹がキリキリと下痢の症状が始まった。そんな時は帰る道順の先頭より10メートルほど先へ走って行き、道路よりちょっと離れた田んぼや物陰で便をして部隊が来たら列に入って付いて行く。何人もの兵隊が同じような行動をとっている。こうした討伐と言う⁽¹¹⁾ゲリラ的戦略で、敵を攻撃したり⁽¹²⁾戦利品として生活物資等を度々調達した。

-
- 1 討伐...軍隊を送り、抵抗するものを討ち滅ぼすこと。
 - 2 糧秣...軍隊での兵と馬の糧食
 - 3 軽機関銃（軽機）...一人で持ち運び操作できる機関銃。
 - 4 上官...上級の官職。また、その人。
 - 5 狼煙...急ぎの時の合図に、薪を焚き、または筒に火薬を込めて上げる煙。
 - 6 至近弾...直撃はしなかったが、爆風や破片などで何らかの被害が及ぶ可能性のある範囲内に落ちた弾のこと。
 - 7 斥候兵...敵状・地形等の状況を偵察・捜索させるため、部隊から派遣する少数の兵士。
 - 8 援護射撃...敵の攻撃から見方を守るために、側面や後方から射撃を行うこと。
 - 9 衛生兵...軍隊において、医療や衛生管理に関する業務を行う兵士。
 - 10 ポーフラ...蚊の幼虫。水中に住み、体は短い棒状で、くねくねと運動し浮き沈みする。
 - 11 ゲリラ...小部隊による奇襲などで敵を混乱させる戦法。
 - 12 戦利品...戦争で、敵から奪い取った物品。

軍隊生活

岡田良平さん

昭和19年の夏，大東亜戦争の戦火は，激しさを増していた。

私は，今の韓国釜山の第七小学校で徴兵検査を受けた。判定官から「第一乙種合格」の判定を下され，当時では名誉な帝国軍人の卵が誕生したのである。人々の励ましに答え，「大東亜戦争の激しくなる中で，軍人として召されることを光栄に思い，大日本帝国の防波堤になる覚悟で戦ってきます」と決意を述べ，祝入営のタスキを掛け，奉公袋を持ち，万歳の声に送られ集合場所に向かった。敬礼をして両親や見送りの人に別れを告げ，点呼を受けて携行品を受け取った。ベルトは布製，帯剣の鞘は竹製，背囊は無く，驚いたのは水筒が竹製で，銃は38式という様にならない帝国軍人の姿であった。物の不足が軍人にまで及んでいることを感じた。号令と共に進軍ラッパが鳴り，120名余の隊列が校門を通過して大庁町の坂道に出た。万歳の声が聞こえて振り返ったが，既に校門は閉じられ，腕章をした憲兵が立っていた。私たちの隊列は電車通りに沿って，釜山駅を過ぎ栈橋に着いた。

その日の夜中に出航し翌朝下関港に停泊。行先も知らされないまま，直ぐに窓のない貨物列車に詰め込まれ徳山駅に着いた。駅から櫛ヶ浜くしがはまにある兵舎まで歩き，それぞれ各班に配属され，翌日の計画，日課，規律，注意事項



等々を聞いて床に就いた。軍人としての初夜，これからのことを考え，目をつむっても寝付かれず，色々な思いが巡り，巡回の足音を幾度聞いたことか。翌朝，初年兵集合が掛かった。部隊長が式台に上がるのを見て号令を掛け，私は駆け足で部隊長の前に立ち，「申告します。岡田二等兵ほか125名は，4月13日付けをもって，船舶1215部

隊に入隊を命ぜられました。ここに謹んで申告します。」と申告，ここに大日本帝国軍人が誕生したのであった。翌日から初年兵教育が始まった。学校時代の教練の繰り返しがほとんどで，苦とは思わなかった。特に，船舶兵であったので，手旗の訓練は厳しかったが，海洋少年団で手旗は鍛えられていたのですぐに覚えて慣れた。覚えの悪い者には容赦なく体罰があった。海辺に近い兵舎だったが，訓練中に一度も船に乗ること無く，行方も知らされず下関に移動した。

ある日のこと，⁽⁵⁾曹長から指揮班に入るように言われ，部隊の事務を執ることになった。指揮班では恵まれていたが，班に帰ると，人格も人権も問答無用で，個人の行動がその時々上官の目にどの様に映ったか，上官の心情がどうであったかで体罰が行われた。それは「上官の命は天皇陛下の命である。」と言う⁽⁶⁾軍人勅諭が絶対的な規範としてあるからである。またある日，空襲警報が発令され，暗闇の中を完全武装して集合した。この警報が鳴ってから時間は経っていないのに，もう豊後水道側からB29が山の上に飛来しており，サーチライトに照らし出され，あちらこちらから砲火の赤い塊が火花のように交差しながら敵機を追っていた。突然，照明弾が落とされ真昼のように街並みが映し出されると，あちらこちらから火の手が上がり，炎が関門海峡の海面に映り余計に被害の大きさを感じた。応戦する我が軍機も⁽⁷⁾対空砲火もなく，明かりを消してじっと耐えて敵機の行き過ぎるのを待つ防空体制を見せつけられ，戦争がこんなに身近に迫って来ていると実感した。

下関での生活も僅かな期間であったと思う。また行先も知らされず，貨物列車に乗せられて^{はぎ}萩へ移動した。初めて軍隊が来たと言うことで，沿道には多くの人が日の丸の小旗を振って出迎え，緊張もしたが誇らしくも感じ町を行進して宿舎に落ち着いた。昭和20年5月頃は，既に日本の空と海はほとんどアメリカに制覇されていた。当時，物資食糧等の不足は満州・朝鮮からの海上ルートで輸送されており，輸送基地で朝鮮に近い港は爆撃され使用不能だったため，西日本で軍事物資の中継地として使用可能な^{はぎ}萩港が選ばれた。私たち船舶部隊の役目は，この港から徴用された⁽⁸⁾機帆船と乗組員で編成され

た輸送船団を護衛し、物資を陸揚げして目的地に送り出す荷役作業であった。⁽⁹⁾船倉から大豆の袋を2人掛りで持ち上げ、人の背中に乗せて運搬させるため、袋に穴が空き大豆がこぼれ出すことがあった。当時、⁽¹⁰⁾耐乏生活を強いられていた国民には、このこぼれた大豆でも貴重な食料源で、運搬が始まると競って破れた袋を目当てに人が増えてくる光景を見ると、食糧事情の⁽¹¹⁾窮乏を実感し、わざと穴を広げ大豆を落としながら重い袋を背負って歩いたことを思い出す。

終戦間近のころは、朝鮮海峡も⁽¹²⁾風雲急を告げていた。運搬船の入港もたまにしかなく、したがって運搬作業もたまであり、兵隊の士気を鼓舞するため銃剣術の大会があったのを覚えている。8月1日付けで幹部候補生の発表があり、私は5名の技術幹部候補生の1人に選ばれ、一躍4階級上の⁽¹³⁾伍長の^{ごちょう}襟章と座金が軍服に輝いた。発表の時の話では、技術幹部候補生は⁽¹⁴⁾広島^{はぎ}の陸軍工廠で訓練を受けると聞いていたが、全員が萩市の対岸の越ヶ浜の旅館に集められ訓練が始まった。そこで「広島に黄色の爆弾が落とされたそうだ。」と言う話を聞いたが、それが原子爆弾であった事などは知らされなかった。

それから、終戦の玉音を聞くことも無く、かやの外で終戦の知らせを聞き、意気に燃えていた候補生たちは嘆き、血の気の多い仲間が「1人になっても戦うのだ。」と信じられず迷っていた者もいた。9月8日に解散式が行われ⁽¹⁵⁾除隊になり、これからどうすればいいのか何処へ帰ればいいのかと、頭はいっぱいであれこれと迷った。生きて帰れないと思って入隊したのに、戦場にも行かず、内地にいても爆撃に合うことも無く、幸い生きていた。しかし、敗戦で、生まれ育ち家族と再会できた釜山はすでに外国で、日本人は引き揚げねばならず、惨めな家族全員のゼロからの出発が待っていたのである。生きることの苦しさで、生きて帰ったことを恨んだこともあった。引き揚げ当時は生きることが第一で、戦争がいかに愚かであったかを感じ戦争を憎んだのは、時間が経ちいろんな話や情報を知ってからだったと思う。

戦争は前線で戦う軍人ばかりではなく、広島・長崎の原爆をはじめ、沖縄での戦い、本土空襲でも非戦闘員の多くを殺し、また、相手国の軍人も非戦闘員も被害をこうむる

のであって、いかに戦争が愚かで惨めであることか。

-
- 1 入営...兵役義務者または志願兵が、軍務に就くために兵営（軍人が集団で居住する所）に入ること。
 - 2 奉公袋...召集の際に兵士が持参する袋で、印章、軍隊手帳、貯金通帳、遺書、遺髪、召集令状などの入営に際して必要なものを入れて携行した。
 - 3 背囊...軍人・学生などが物を入れて背に負う方形のカバン。皮・ズックなどで造る。
 - 4 38式...三八式歩兵銃。明治38年に正式化された旧日本陸軍の歩兵銃。
 - 5 曹長...軍の階級の一つ。下士官の中では最上位の階級。軍曹の上。
 - 6 軍人勅諭...明治15年(1882)明治天皇から陸海軍人に与えられた勅諭。旧陸海軍人の精神教育の基本とされた。
 - 7 対空砲火...航空機に対して行われる、火砲による攻撃である。
 - 8 機帆船...発動機と帆を備えた小型の木造船。
 - 9 船倉...艦船内の上甲板の下の、貨物を積み込むところ。ふなぐら。
 - 10 耐乏...物資の乏しい状態を耐え忍ぶこと。
 - 11 窮乏...金や物品が不足して、生活に困ること。
 - 12 風雲急を告げる...今にも大きな変動が起きそうな、さしせまった情勢であること。
 - 13 伍長...軍の階級の一つ。下士官の中では最下位の階級。軍曹の下。
 - 14 工廠...軍に直属し、兵器・弾薬を作る工場。
 - 15 除隊...軍人が負傷・兵役の満了、あるいは懲戒などにより、軍隊を辞めること。退役ともいう。

私の海軍生活

渡 邊 莊 さん

私は自分が軍人に向いているとも軍人になりたいとも思っていなかった。大学も文学部哲学科，嵐山の禅寺に下宿させてもらい，小僧さんのすることを真似していた。それが徴兵検査で第一乙種合格となり，セーラー服も愛らしい海軍二等水兵となった。

万事戸惑うことばかり。まず玄米食に強烈パンチを喰らわされた。この健康的な主食は昨今の圧力釜によるものよりずっと硬く，良く噛まないで腹をこわし，良く噛むと歯を痛める。私は腹の方を大切にしたので歯が痛くなり，病室に出頭した。軍医殿はしげしげと診察したあげく「貴様，歯はどこも悪くない。それが痛むのであれば，原因はどうやら耳にある。耳たぶの膨らみが怪しい。じっとしておれ。」と言って，私の左耳たぶの一部を切り取った。中には白い脂肪の塊があった。

ところが，病状は一向に改善されず，逆に頬が脹れてきて，他の軍医から「これはお多福かぜじゃ。」とされ，入室の憂き目をみることとなった。その後出会った時，例の軍医中尉は苦笑いしていた。この耳たぶの切り傷が海軍生活で受けた私の唯一の公傷である。

昭和19年2月，予備学生に任官し，同輩は横須賀に近い武山の学生隊に移動したが，私は流行性疾患の疑いありということで（のどが少し赤かった），みんなと一緒に武山へは行ったが，そこの病室に入らねばならなかった。細菌培養の結果マイナスと判定されるまで出られない。ここでは食事の配膳は同じ入室者の若年兵が担当するが，兵長や上級水兵の飯はうず高く盛り上げられ，自分たちの食器にはその半分以下しかよそわれない。陛下の赤子としてお国のために身命を捧げた者同士であるのに，実に異様な光景であった。学生隊での5カ月余りの基礎教程はしごきの連続，苛烈な戦闘が待っているのだから当然のこと。将校学生らしからぬ者がいるとて隊長から罵倒されたり，お互いに向き合っ（つりゆか）てビンタの練習をさせられたり，朝食前に吊床を担いで広大な営庭を駆け足さ

せられたり、あげればきりが無い。その頃同じ班のものと一緒に撮った写真を郷里に送ったが、どれが私か誰にも分からなかったという。まっ黒に日焼けした白い訓練服の若者ばかりなので。圧巻は真夏の炎天下、完全武装で分隊対抗の競争をさせられた。なんとこの凄惨な競技で我が八分隊は全学生隊12ヶ分隊で1位となったのだから呆れる。

次の術科教程では航海学校を選んだ。海原を自分の腕で船を操って行くなど男冥利に尽きるではないか。ところが、私が六分儀⁽¹⁰⁾で星の高度を測り、地球上の位置を計算している間に、戦況は深刻極まるものとなっていた。

歓呼の声に送られて郷里を出た頃から、南太平洋では死闘が続き、拠点は次々と奪われて劣勢は顕著となり、航校へ進む一週間前、7月7日サイパン島では玉砕していた。

サイパンから東京までは2,250キロ、丁度完成していたB29爆撃機にとって格好の空襲コースとなり、私が航校を卒業する1ヶ月前頃から頻繁に用いられ、その度に日本では焼野原が広がった。



12月25日、航校卒業で少尉に

任官したが、私は大竹の海軍潜水学校で特修科学生となった。他の多くの者と同じく実施部隊に配属されたかったが、如何せん、その頃水上を航走する艦艇は大半が失われており、水中を潜る船しか行き場がなかったわけ。

潜水艦はもはや船ではない。機械そのもの。機械の中に人間が入り込んで動かす。乗組員は全てベテランでなければならない。一人のちょっとしたミスが全員の死をもたらすのだから。

ここではもう一人前の士官であったので、待遇も格段に良くなり、外出したら岩国やおおはた⁽¹¹⁾大畠で、物資不足の銃後社会でそこだけは酒肉のあった水交社別館⁽¹²⁾で、したたかに飲食した。流行歌に造詣の深い戦友のノートから「幻の影を慕いて」とか「祇園小唄」など^{ぎおんこうた}

を写し、熱心に曲を覚えていた。

昭和20年4月、米軍は沖縄本島に上陸し、「戦艦大和」も徳之島沖とくのしまで海底に沈み、我々は最後の持ち場として、横須賀特攻隊付を命じられた。2人乗りの特殊潜航艇「海竜」に搭乗する。予科練から回ってきた可憐なかれん一飛曹(13)が艇付(14)。本土決戦に備えて水際で敵艦船撃滅が任務。もちろん「我々の生命と引き換えに」である。

8月4日、隊長から(15)引導を渡された。「舵を少しは振らせても良い。吸排気筒を出して(16)露頭しても良い。何百隻という船団の中へ突っ込むのだから目標はいくらでもある。(17)安全解脱接片を外し、レバーを引きさえすれば輸送船撃沈は簡単なことだ。その時までに事故で艇を沈めるなど絶対にあってはならぬ。」

8月15日正午、玉音放送があるから軍装略(18)綬(19)にて参列せよとの命令が出たが、あいにく二種軍装は洗濯に出していたので私は出席できなかった。私の海軍生活に終止符を打ったのはこの放送であった。(20)(21)英霊諸兄に合掌！

-
- 1 公傷...公務中に受けた傷。
 - 2 同輩...地位・年齢・身分などが同じくらいの人。
 - 3 流行性疾患...ウイルスに感染することで引き起こされる疾患。
 - 4 陛下の赤子...戦前、日本国民は天皇陛下の子供とされていた。
 - 5 しごき...厳しく鍛錬すること。
 - 6 苛烈...きびしくはげしいこと。
 - 7 罵倒...激しい言葉でののしること。
 - 8 吊床...吊り下げた寝床。ハンモック。
 - 9 営庭...兵営の中の広場。
 - 10 六分儀...60度(円周の6分の1)の円弧と小望遠鏡・2個の平面鏡からなり、天体の高度を測るのに使う器械。船の位置を測定するのに用いる。
 - 11 銃後...直接は戦争に参加していない一般国民や国内のことをさす。
 - 12 水交社...明治9年(1876)に創設された旧日本海軍高等官の親睦および研究・共済を目的とする団体。
 - 13 一飛曹...旧日本海軍の階級の一つ。一等飛行兵曹の略。
 - 14 艇付...乗組員。
 - 15 引導を渡す...死を逃れられないことを相手にわからせること。
 - 16 露頭...頭をむき出しにしていること。
 - 17 安全解脱切片...命中までは、衝撃を受けても爆発しない様、信管の作動を停めておく器具。

- 18 軍装...軍服を身に付けること。
- 19 略綬...勲章や記章の代わりに着用する綬（リボン）のこと。
- 20 英霊...死者。特に戦死者の霊を敬っていう語。
- 21 諸兄...同輩あるいは近しい先輩などに対して、敬愛の気持ちをこめていう語。

従軍記

沖 悦 子 さん

これは、御家族の自分史の一節で、第7戦隊浜松飛行戦隊で将兵等を輸送する任務に就き、最後の搭乗について書いた場面です。

忘れることの出来ない最後の飛行は昭和20年4月24日。(運送屋廃業日と記憶する。)この日、4月というに5月中ごろの霞^{かすみ}の多い好天気。昨日インコウより開城⁽¹⁾に着き、十分な睡眠も取ったし体調共に良好だし、今日は嘉手納往復⁽²⁾だけで離陸時間も9時の予定と言う事もあり、久しぶりにのんびりと朝食にありつく。いつもの事ながら、

我々4名の仲間(戦友)は機長たちとも他の搭乗員とも離れた場所に陣取りのんきに馬鹿な話ばかり言い合っている。煙草の支給が多いのかいつも誰かの煙草が



くゆっている有様だ。今日も恩賜⁽³⁾の煙草を頂くが、まだ生きている。出発時刻が近づくが、将兵の姿が見えなく、糧秣^{りょうまつ}と弾薬の準備のようだ。兵士が各機に5、6名乗り込み10分遅れて離陸する。上空に雲一つない飛行日和だ。脇から機長が「こんな日には注意して飛べよ。」と忠告してくれる。9機1波の編隊飛行で我が機は6番に位置する。敵機の姿も見えず、沖縄の島もかすかに見え始めた時、伝声管⁽⁴⁾に「南方より敵編隊北上中、嘉手納着陸を北飛行場に変更せよ。」の指令があり、我々は即座に着陸姿勢に入るが、いまだ私も機長もこの飛行場は初めてのこと。着陸可能なのか？我が機はしばらく上空で旋回待機が続く。滑走路は短く、端は海だ。「制動を掛けねば駄目だぞ。」と機長の声を耳にしながら、早めに2速に落とす。上出来の着陸だが、誘導する兵士の姿は無く、慌ただしい場内の動きが見える。

9番機も着陸する。走るトラックの上から2,3名の兵士が声を限りに何やら叫んで通り過ぎるが聞き取れない。2,3分後「弾薬を降ろし,速やかに空中分散せよ,敵機接近中。」と伝令が伝えて,また走る。バラバラと多くの兵が駆け寄り,弾薬を運びだし,糧秣りょうまつは機上より放り出すが,我々の全機には帰り着く燃料がない。隊長機に連絡に出ていた機長が息せき切って帰り,「燃料の続く限り陸地に飛ぶ。」と地上兵に合図する。全機始動に掛かり,空ぶかしすることも無く,我先にと飛び立つ。200mも昇



った頃,機長は「高度はここまでに針路北に取れ。」と言う。1番近い陸地は中国大陸しかない。私は何となく敵に遭遇する予感がわいてきて,銃座に着くことを進言した。機長も私の意見に同意し,「速やかに配置に着け。」と命じ,「操縦代わるぞ。」と直に桿(5)を持ってくれる。離陸後,5,6分飛行したころ,機長が「来たぞ」と大声を出す。前上方30度

にP38の15,6機の群れを見る。(6)我々より先に離陸した5機が7~800m前を高度も区々まちまちにまともに飛び込んでいく。頭上の敵機に気がついていないのか。危ないと思う間もなくその1機が垂直になり,落ちて行く。続けざまにまた1機が真っ赤な炎を上げる。雀すずめは上に下に飛び交う。炎はアッと言う間に広がり,黒煙を引いて落ちて行く。機長は「駄目だ。」と言うが早いか180度針路を変えて高度を100mまで降ろす。不運にも雲一つない。突然,曳光弾(7)の帯が顔面を1条2条と掠め飛び, P38が側方を急上昇する。機銃音がバリバリと聞こえるほど近くだ。我が機首も尾座(8)の機銃も負けじと一斉に火を噴く。我が機はさらに30mまで下げる限界高度だ。これ以上降ろすと水を被る。

プチプチと張り詰めた紙を針で突き刺すような異様な音を耳にする。大きく機を振る

動作をしているようだが、重いので動きが緩慢だ。また尾座の機銃がババババンと休みなく唸^{うな}る。敵機は我が機を笑うがごとくに悠然と我が機の真横を飛び過ぎる。機首の機銃がそれを追うかのようにバリバリと鳴るがこれも無駄だ。よく我々の弱点を知っての攻撃だ。5、6分の戦いか30分の戦いか分からない。前、上下、左右と血まなこに見張る目に島影を洋上に見る事が出来た。敵機の姿もなくなり、機長が「済州島だが行き着くかな。」と口を開いてくれた。燃料は7速の全速飛行のため、指針0を示しており、2、3分持てば良いところだ。高度を最後の力で昇る。200m、250mで3速に落とす。半滑空⁽¹⁰⁾で飛行場が見えてくるが、滑走路の真ん中で1機のエンジンから黒煙を上げている。滑走路がふさがれていては、とても着陸は無理だ。「北まで飛ぶか？」と独り言を言う機長はまたまた上昇を始めるが50mも上がらず、高度は落ち始める。「全員安全帯を強く締めろ。」と重い口調で皆に指示する。小高い丘の向こうに飛行場が見える。完全滑空で、それも滑走路と進入角は90度も違い、進入角を合わすため大きく旋回する。このままの飛行だと森に突っ込むと私は無造作に足を踏ん張った。最後の1滴の燃料か？エンジンはパンパパンの音を残して左が停止した。私は見開いていた目を一瞬閉じた。次の瞬間、機の下部をバリバリと松の枝^たが叩く。ババンと右エンジンも停止し、1、2度翼を小枝^なが撫ぜるが何とか障がいの丘は乗り越えたようだ。一度車輪は接地したが砂地に潜り込み尾部が浮いて来る。瞬時に私は裏返ると判断して両手を前に突き出した。何のためか？後で考えるとお笑い草だ。が次の瞬間、バリバリでもなくベキベキでもない異様な音で機は大きく棒立ちで止まってくれた。2人の乗員は操縦室に4本の足を振り上げて安全帯で宙吊りの姿でいる。そんな事には目もくれず機長は「やっちゃった。」と頭を抱えて呟^{つぶや}き、私の顔を見る。私はよくぞここまで飛んで来ることが出来たと機長の的確な判断と技量に敬服する。

その後、幾度と危険な状況に追い込まれながら、昭和20年8月29日8時過ぎ、無事日本へ帰還されました。

-
- 1 インコウ... 營口。中華人民共和國遼寧省にある都市。
 - 2 開城... 朝鮮民主主義人民共和国の南部にある都市。
 - 3 恩賜... 君主から臣下などに対して、これまでの忠節や功勞を感謝するために与える物品。
 - 4 伝声管... 離れた場所と直接通話ができるように設けた長い管。船舶・航空機などで用いた。
 - 5 桿... さお状の棒。ここでは操縦桿のこと。
 - 6 P 3 8 ... ロッキード社が開発し、1939 年にアメリカ陸軍に正式採用された双胴（正確には三胴）双発、単座の高速戦闘機。
 - 7 曳光弾... 射撃後、飛んで行く間に発光することで軌跡がわかるようになっている弾丸のこと。
 - 8 機首... 航空機の胴体の前頭部。
 - 9 尾座... 軍用機の尾部に設置された銃座。
 - 10 滑空... 航空機のエンジン停止状態や遅い回転状態での飛行。

日本に引き揚げの前後

亀山茂弘さん

日本の敗戦時、陸軍軍人の私はソ連軍の捕虜⁽¹⁾となり、中国東北部（旧満州）の延吉収容所に収容され、使役⁽²⁾に従事していた。翌年の春に、身体検査の結果、私達のように痩せ細った者は中国軍に引き渡され、貨物列車で移送され、四平という街に到着した。この時に、耳をつんざく鉄砲の響きで中国軍と国府軍が内戦の真ただ中であることを知り、使役に従事して犬死すれば野獣の餌になるだけだと思い、逃走を重ね病魔に侵されていたところ、公主嶺⁽³⁾の日本居留民団に救護された。

2か月後、民団が日本引揚命令を受けたので仲間入りさせてもらい、無蓋列車で錦州を通りコロ⁽⁴⁾（葫芦）島に到着した。埠頭⁽⁵⁾において数度の身体検査を受け、岸壁に係留されている日本の引揚船に向かった。この時、多くの歩哨⁽⁶⁾の前を通り抜けるのだが、呼び止められ乗船拒否されると帰国の目途が無くなるのでひやひやしていた。日本船に乗船すると、「お帰りなさい。」という優しい言葉に安心感が込み上げ涙が⁽⁷⁾滲み出た。

船中で数日後、「日本が見える。」という叫び声で多くの人がデッキに上がり周りを見ると、点在している美しい島々、「箱庭のような。」と歓声を上げて喜び合う。

船は佐世保港に入港（昭和21年8月31日）。引揚援護局で帰国の手続きを終え、翌日各自は帰宅のため国鉄佐世保駅に向かった。道中米兵と若い日本女性のにこやかなアベック姿を見ると複雑な気になる。また、道中道端で売っている美味しそうな⁽⁸⁾饅頭を見て2個買い、さつま芋の蔓⁽⁹⁾で拵えたあんころであるが、久しぶりに食べる⁽¹⁰⁾饅頭の味は甘くて頬が落ちるほど美味しく感じられた。

汽車に乗り本籍地の倉敷市玉島に向かう。車中から眺める都市は空襲で焼け野原になり、⁽¹¹⁾バラックが点在している。金光駅で下車し、2キロほど歩いて玉島の叔父の農家に到着した。叔父夫婦は、痩せ細き体に中国服姿の私を見て⁽¹²⁾喫驚したが、親切に扱ってくれた。従兄弟で郵便局員と石工職人の消息を尋ねると、「2人の息子は白布で包まれ

た木箱⁽⁷⁾の中で帰ってきました。」と叔父夫婦は話して涙顔になる。

2 か月ほど保養すると健康を回復し，11月から笠岡市の干拓工事に従事する。私は学生時代，岡山市駅元町内で下宿していた。関西中学校時代を回顧し，昭和22年の桜の花が咲き始めた4月に汽車で岡山駅に向かった。市内は米軍の空襲で焼け野原になっているが，小さなバラック建が連なっている。駅前⁽⁸⁾で14，5歳の子供が，4，5人通行人を呼び止め靴磨きをしている。聞くと，空襲で家や家族を失い街頭でくらすようになり，靴磨きをして駄賃⁽⁸⁾をもらい生活している戦争犠牲者であると判明した。駅前の闇市に足を入れると，衣類や白米の御飯や豚汁など多くの品が手に入るが値段は高かった。

昭和21年3月3日に物資不足，食糧難時代に経済秩序を維持する目的で物価統制令⁽⁹⁾の勅令が施行された。主食の米麦，衣類，油など多くの品々が配給制度の時代であった。食糧難の折から，岡山県内には，姫路・大阪方面から食料品の買出しの人が殺到し，午後からの上り列車は食料品の米類が担ぎ込まれ混雑していた。一般買出し人は両手で掲げるほどの荷物を運搬しているが，悪質ブローカー⁽¹⁰⁾になると，1人で1包⁽¹¹⁾(1斗入り白米)の紙袋を4，5個，他人の迷惑も考えずに乗客の座る座席の下に押し入れる横暴者もいた。岡山駅西口駅元町に回り，私が学生時代に下宿していた跡地に足を踏み入れ消息を聞いたが確証を得ることは出来なかった。

戦争に巻き込まれ，被害を被るのは一般市民である。人類の敵は戦争である。世界ではイデオロギー⁽¹²⁾，宗教や民族などが纏れ^{もつ}合い，激しく対立が続き，戦争となる兆しが絶えることがないのが残念で堪えられない。

-
- 1 捕虜...戦争などで敵に捕えられた人。
 - 2 使役...人を使って何かをさせること，働かせること。
 - 3 無蓋列車...屋根のない貨車。
 - 4 歩哨...兵営・陣地の要所に立って，警戒・監視の任にあたること。また，その兵。
 - 5 バラック...急造の粗末な建物。仮小屋。
 - 6 喫驚...驚くこと，びっくりすること。
 - 7 木箱の中...戦死した。戦死した兵士の遺品・遺骨は木箱に収められ家族のもとに送られた。戦況が悪化するにつれ，遺品を収めることができず空の木箱が返ってくることもあった。

- 8 駄賃...、簡単なことを頼んだときに、その労力に対して与える賃金。
- 9 物価統制令の勅令...闇市などで物品が不当に高騰することを防ぐために制定された法令。
- 10 ブローカー...売買を仲買する人。
- 11 斗...容積の単位。1斗は10升，約18リットル。
- 12 イデオロギー...思想の体系・傾向，物の考え方。

パラオ戦記

守分勝政さん

先日、今年4月に天皇皇后両陛下が、戦没者を慰霊⁽¹⁾するため、パラオ共和国を訪問することが決定したと発表された。

昭和19年8月下旬、私はパラオ守備の海軍第30根拠地隊の主力戦闘部隊である第45警備隊指揮下の本島南部にあるアイライ⁽²⁾高角砲台の分隊士として、連日豪北方面から飛来する米軍大型爆撃機の大編隊を迎撃、爆弾の炸裂⁽³⁾、雨の如き銃撃、吹き上がる硝煙⁽⁴⁾の中、激しい対空戦闘を行っていた。

7月、既にサイパン、グアムを制圧した米軍は、フィリピン奪回をめざし、まず陸上航空基地を求めてパラオに来襲することは必至の状況にあった。果たして9月7日、夜明け

とともに東方海上に敵艦船群を発見、空母11隻を含む艦艇、輸送船100隻以上の大攻撃部隊の来襲である。フィリピン作戦の先駆として予期されていたパラオ防衛戦の幕が切って落とされる。次々と発進する艦載機数十機の大編隊が我が砲台に殺到する。数十機づつが我が砲台めがけて銃撃しつつ急降下、爆弾を投下し東方海上に逃れて行く。

我々を掩護⁽⁵⁾して友軍の機銃砲台も一斉射撃を始める。轟音天地を揺るがす。決死の興奮か、何も考える余裕なし、砲台全員阿修羅⁽⁶⁾の如く対空戦闘を継続す。敵軍機は終日パラオ本島上空を乱舞して、弾薬、食糧、燃料等の集積個所に徹底攻撃を行い、全島⁽⁷⁾火炎と濛々たる硝煙に覆われる。地獄の戦場に夜が訪れ、敵機の攻撃も散発的となる。全員気を取り直して、戦死者の収容、病院移送、戦死者の埋葬を行う。



9月15日、米軍は本島の南40キロの南洋最大の飛行場のあるペリリュー島とその南のアンガウル島に上陸を開始する。⁽⁷⁾ 凄絶極まる砲爆撃下、中川大佐指揮の水戸歩兵第二連隊を基幹とする陸海守備隊1万は、当時世界最強の軍隊と豪語する第一海兵師団(ファーストマリーン)4万を迎撃⁽⁸⁾、猛烈果敢なる反撃に出る。⁽⁹⁾ 陸軍南方総軍より「我に救援の手段はなく^{いたずら} 徒に貴軍の孤軍奮闘を祈るのみ。」、また⁽¹⁰⁾ 連合艦隊から「南西方面部隊をして作戦支援を命じたるも、その航空兵力不足にして貴軍の期待に副えざるを遺憾⁽¹³⁾とす。」との電報が来る。今更何に頼らん、守備隊の闘魂更に燃え上がる。高崎十五連隊飯田大隊の逆上陸、海軍水偵2機による夜間決死の爆撃に米軍海兵隊は死傷者50%を越え、遂に⁽¹⁴⁾ 戦線離脱。陸軍第81師団と交代する。圧倒的物量を前に死闘2か月余り、守備隊は11月24日遂に最後の時を迎える。中川大佐は残兵55名に遊撃戦を命じ、守備隊の最後を示す暗号「サクラ、サクラ」を集団に連送し、⁽¹⁵⁾ 自決する。

更にもう1つ述べたい事、それはパラオでは将に軍民一致団結の戦いであった。しかし、ペリリュー島では既に民間人の安全を願って本島に送っており、残った青年男女は軍と共に戦い抜いたのである。女性グループの一群は洞窟にこもり銃を取り、勇敢にも米兵を狙撃してきたのを見たとの米軍の証言もある。また、アンガウルでは隊長後藤少佐は、共に戦いたいと言う島民に「死ぬのは軍人だけでよい。みなさんは安全地帯で生き残り、米軍の保護を受けなさい。」と前線から退避させたとのこと。

11月以降、主戦場はフィリピン島に移るも、一艦一機の補給無き守備隊に⁽¹⁶⁾ 飢餓との戦いが始まる。さつま芋の葉が塩汁に浮かぶその下に米粒少しが普通。全員次第に痩せ衰えて行く。これ将に飢餓の様相か。荒れ地を耕しても何もできない。何とかかんとか食べそうなものを探してくる。バナナの花、茎、根、⁽¹⁷⁾ ビンロー樹の芽等、犬猫も、ヘビやトカゲも姿を消し、それでも^{ようや} 頑張^{かぼちゃ}って漸く畑に南瓜、タピオカ、パパイヤが少してきるようになる。夜間時折り銃声が響く。各部隊はそれぞれ食糧庫や畑を守る。⁽¹⁸⁾ 軍紀、軍律もない事件も増えてくる。しかし、この苦境の中でも陸海守備隊の戦闘態勢は厳として保たれ、愛する祖国のために戦い抜かんの闘魂に少しも揺るぎはなかった。

司令部は全軍をあげて二島奪回作戦を考えていた。

昭和35年，陸海の生還軍人及び民間人，更に共和国の人々の献金により，旧南洋庁があったコロール島に戦没者の慰霊碑を建立した。碑石には日英両文で次の言葉が刻まれている。

「第二次世界大戦における有数の激戦地，このパラオで亡くなられた日米両軍の兵士及び民間の人々の御霊の冥福と永遠の平和を祈願する。これらの死は決して無駄ではなく，今日の世界平和の礎となったものと信ずる。」

-
- 1 慰霊...死んだ人や動物の霊を慰めること。
 - 2 高角砲...敵の戦闘機を撃墜するために地上や戦闘艦艇に配備された火砲。
 - 3 豪北...オーストラリアの北方。
 - 4 硝煙...火薬の発火によって生じる煙。
 - 5 阿修羅の如く...激しく戦う様子のたとえ。
 - 6 火焰...ほのお。
 - 7 凄絶...非常にすさまじいこと。
 - 8 迎撃...攻めてくる相手を迎え撃つこと。
 - 9 猛烈果敢...勢いが激しく，大胆この上ないこと。
 - 10 陸軍南方総軍...太平洋戦争において，東南アジア方面全陸軍部隊を統括する総軍として，大陸命第555号に基づき昭和16年(1941)11月6日に編成された。開戦後は一連の南方作戦を指揮し，また戦前より日本領である南洋群島や，同盟国においても防衛・軍政の任に当たった。
 - 11 孤軍奮闘...援軍もなく孤立した中で懸命に戦うこと。
 - 12 連合艦隊...旧日本海軍が戦時，事変，演習の際に艦隊2個以上をもって編制した艦隊。日清戦争に際して初めて編制され，1933年以後は常時編制となった。
 - 13 遺憾...期待したようにならず，心残りであること。残念に思うこと。
 - 14 戦線離脱...戦闘を交えている地域から離れること。
 - 15 自決...自分の手で生命を絶つこと。自殺。自害。
 - 16 飢餓...食べ物がなくて飢えること。
 - 17 ビンロー...ヤシ科の植物。
 - 18 軍紀・軍律...軍隊の風紀と規律。

海軍航空隊整備兵

匿名希望

16歳から⁽¹⁾徴用と言って、広島県の広村にあった第11⁽²⁾海軍航空廠で無線の修理を行っていた。ここにいたのではいけないと思い、18歳になってすぐに兵隊に志願し、試験を受けたら合格した。海軍航空隊整備兵⁽³⁾になるため、大竹海兵団で3ヶ月間の新兵教育を受けた。そこでは、「死ぬ」ということはなんとも無いということをおぼえられた。30人一組で1人が失敗すると全員が罰を受けた。それは、野球のバット(木製)で尻をおもいきり3回叩かれるというもので、5回も叩くと死んでしまう。叩く場所が背骨にずれようものなら、背骨が折れて即死してしまうこともあった。背骨が折れるかバットが折れるかというくらいおもいきり叩いたので、アザでお尻が何日も真っ黒になり、皆お風呂で患部を揉んでいた。それに耐えられない者は、首を吊ったり、腹を切って自殺していった。とてもかわいそうだったが、その処分も自分たちでさせられた。それは激しいものだった。

新兵教育が終わると、今度は厚木海軍航空隊で4か月間、飛行機の整備兵となるための教育を受けた。飛行機のエンジンを分解したり組み立てたりして、一生懸命に修理に必要な技術を習得していった。そこでは、新兵教育の時のような暴力はなかったが、失敗するとすぐにピンタが飛んで来るといった状況で、指導が徹底していた。

4か月間そこで修業し、飛行機の構造を一通り覚えると、今度はいよいよ呉海軍航空隊に配属となった。そこでは陸上飛行機、水上飛行機⁽⁴⁾、戦体の真下に船の付いた戦闘機や、3人乗りの偵察機⁽⁵⁾などのエンジンの修理を行っていた。ある日突然、B29が飛来し、何か黒いものが落ちてくると見ていると、「ドンドンドン」と大きな1トン爆弾が落ちて来て、滑走路にいくつも直径10mの大きな穴を開けた。爆弾の爆風により割れた窓ガラスや部品が飛んで来て、多くの死傷者を出した。その中で1人、腕組みをして⁽⁶⁾微動だにせず座っている者がいた。よく見ると爆弾で顎を吹き飛ばされ、大量の血

が流れていた。それから10分もしないうちにそのまま倒れて死んでいった。一度空襲にあうと、何十人と人が死んでいった。空襲から逃れるため、設置してある防空壕に逃げ込んだ。防空壕の形にも色々あり、入口から真っすぐに穴が伸びるものの場合、入口に爆弾が落ちると爆風が奥まで達し、多くの人の中で死んでいった。途中で曲がっているもの、地下へ伸びるものであったらまだ良かったが。また、真っすぐ伸びる防空壕では、入口に向けて20ミリ機関銃が一発発射されると、中で5人くらいの体を貫通し多くの人倒れていった。それは悲惨なものだった。

滑走路が使えなくなったため、今度は佐伯海軍航空隊へ配属となった。しかし、そこでも、陸にあった滑走路は米軍の空襲で使えなくなったため、水上飛行機への切り替えが行われた。⁽⁷⁾ブイを海上に浮かべ滑走路をつくり、そこから飛び立って行くようになった。水上飛行機だけに毎日エンジンの



点検が必要で、海の中に入りエンジンを分解して点検し、再度エンジンをかけて調子を見ていた。そんなある日、いつもの空襲であればB29の爆撃機がやってくるので気付くのだが、その日に限って中型の飛行機が海面すれすれを飛んできたため全く気付かず、音が聞こえて初めて気が付いた。急いで飛行機を退避させるため、搭乗員を呼びエンジンを始動させた。その時、自分もすぐに海に飛び込んで逃げればよかったのだが、翼につかまってしまい、海上から離水寸前に海に飛び込んだ。もう陸は見えないくらい沖合にいて、「死んでしまう」と思った。陸を目指し6時間くらい泳いだところで漁船に助けられ何とか一命を取り留めた。

佐伯航空隊では、特攻隊を2回見送った。特攻隊の出撃は1度に10機。夜の12時に搭乗員10名を集めて御膳で御馳走を食べさせ、出発は1時間後。戦闘機は腹に10

0キ口爆弾を1つ抱え、投弾できないように細工されていた。時刻が来て、10機の特攻隊が出撃後、監視及び戦果の報告のため1機の偵察機が後を追う。偵察機は目標近くで特攻機に命令し、全てを見届けた後帰還してきた。しかも、特攻機には片道分の燃料しかなく、既に退路は断たれていた。とてもかわいそうで気の毒だった。

佐伯航空隊も使えなくなり、今度は山口県の大浦基地に異動となった。整備兵12名、搭乗員と10機の飛行機と共に行ったのだが、そこは20軒ほどの民家が軒を連ねる部落で、その公会堂を借りて1ヵ月ほど過ごした。しかし、そこも米軍に発見され、今度は3人乗りの偵察機でやって来て、30センチほどの1キ口爆弾を飛行機目がけて投げた。かと思うと、今度は逃げまどう自分たちに機銃掃射してくるのだった。

その後も各地の基地を転属し、最後にソ連軍からの本土防衛のため、青森県の下北半島にある基地に転属となり、そこで終戦を迎える事になったのだが、ここで最も忘れることができない経験をする事になった。そこも小さな部落で、公会堂を借りて20名の仲間とともに生活し、一たび空襲となれば周りの民家を守るという気持ちはあるのだが、敵も迎撃を警戒し、高空からではなく海面すれすれを飛行してやって来た。音がして初めて気付くという状況で、敵機はもうすぐそこまで来ていて、飛行機や逃げまどう人々に向けて機銃掃射した。自分は近くにあった大きな丸太を抱え、銃撃してくる方向にそれを向け、自分の身を守った。多くの方は防空壕に逃げたのだが、その中で機銃の犠牲となり、何人もが死んだ。20人いた仲間のうち、生き残ったのは7人だけだった。日付は8月10日、兵士も含め何十人という遺体を埋葬しなければならず、生きた心地がしなかった。田舎なので何もなく、幸いガソリンはあったので、畑の中に穴を掘り、遺体をその中に集めガソリンをかけて3日間以上かけて火葬した。その時忘れもしない出来事があった。1人の女性が地面を這って自分の所へやってきた。年齢を聞くと「20歳」と答え、女性は「兵隊さんは良い薬を持っているはずだから、その薬を塗れば治るかもしれない。」と言う。塗り薬程度しかないが「何処だ。」と聞くとお尻のあたりを見せた。見ると銃弾が当たらしく、お尻に人差し指くらいの穴が開いていた。「こ

の程度なら」と薬を塗ったのだが、体を仰向けにしてみると、腸や子宮が体から飛び出し、それを引きずって這って来たのだった。しばらくして、その女性は目の前で亡くなった。ここでの出来事は、本当に辛く悲しい経験で、夢にまで出てきたものだった。

最後の所属では、ラジオはなく連絡手段も何もなかった。そのせいで終戦を知ったのは10月の終わりごろだった。それまでは食べることに一生懸命で、貨物でやってきた旧日本軍の兵士に知らされた。それから佐伯航空隊まで帰ることになったのだが、お金も何もないので、やってきた人のトラックに7人乗せてもらい駅まで送ってもらった。聞けば、元兵士はタダで列車に乗れるということで、貨物に揺られ5日間かかって隊事務所まで戻った。道中、岡山駅、広島駅と通過したが、駅から遮るものがない焼け野原で、これから一体どうなるのかと思った。そのうえ、やっとの思いで着いた航空隊事務所はもぬけの殻で、命あった喜びからか、皆いち早く引きあげたのだった。すべてが終わり、家に帰り着いたのは年が明けた2月5日だった。

本当に自分でも良く生き抜くことが出来たと思う。亡くなった人は本当にかわいそうだった。仲良くしていた戦友は、体中を銃で撃ち抜かれ、見る事が出来ないくらいの有様だった。見た者でなければわからない。家に帰る時、軍服などを持って帰ったが、見るのが辛くて写真以外は全て焼いた。

-
- 1 徴用...戦時などに国家が国民を強制的に動員して、兵役以外の一定の業務につかせること。
 - 2 海軍航空廠...航空機の修理整備（末期には製造）を担当する航空本部所管の「空廠」。
 - 3 整備兵...軍用航空機の整備にあたる大日本帝国海軍の兵種。
 - 4 水上飛行機...水面上に浮いて滑走が可能な船型の機体構造、あるいは浮舟（フロート）のような艀装を持つことによって、水上にて離着水できるように設計された航空機。
 - 5 偵察機...敵性地域などの状況を把握するために偵察など情報収集を行う軍用機（航空機）のひとつ。
 - 6 微動だにせず...少しも動かない様子。
 - 7 ブイ...港湾などで、水面に浮かべておく目印。

附

録

太平洋戦争関係年表

昭和 6年(1931年)

9.18 満州事変(柳条湖事件)

昭和 7年(1932年)

3.1 満州国建国

5.15 5.15事件

昭和 8年(1933年)

3.27 日本,国際連盟を脱退

昭和11年(1936年)

2.26 2.26事件

昭和12年(1937年)

7.7 盧溝橋事件。北京郊外の盧溝橋で日中両軍が衝突。
日中戦争(支那事変)が始まる。

12.13 日本軍,南京を占領。南京事件が起こる。

昭和13年(1938年)

4.1 国家総動員法公布

昭和14年(1939年)

9.1 ドイツ軍,ポーランド侵攻。第二次世界大戦始まる

昭和15年(1940年)

9.27 日独伊三国同盟成立

昭和16年(1941年)

4.1 国民学校制始まる

4.13 日ソ中立条約調印

12.8 日本,ハワイ・真珠湾を攻撃。対米英宣戦布告。
アジア・太平洋戦争(大東亜戦争)が始まる。

昭和17年(1942年)

2.15 日本軍,シンガポールを占領

太平洋戦争関係年表

6 . 5 ミッドウェー海戦。日本は主力空母4隻を失う

昭和18年(1943年)

9 . 8 イタリア, 連合国に降伏

10 . 21 第一回学徒出陣壮行会

昭和19年(1944年)

2 . 1 水島航空機製作所で1号機の進空式

7 . 7 マリアナ諸島・サイパン島の日本軍守備隊全滅

昭和20年(1945年)

2 . 19 米軍, 硫黄島に上陸を開始

3 . 10 東京大空襲

3 . 14 大阪大空襲

3 . 17 神戸空襲

4 . 1 米軍, 沖縄本島に上陸

4 . 7 戦艦「大和」が沈没(鹿児島県房ノ岬沖)

5 . 7 ドイツ・連合国に無条件降伏

6 . 22 水島空襲

6 . 23 沖縄での日本軍の組織的抵抗終わる

6 . 29 岡山空襲

7 . 1 ~ 2 呉空襲(市街地)

7 . 4 高松空襲

7 . 26 連合国, ポツダム宣言を発表

8 . 6 広島に原爆投下

太平洋戦争関係年表

8 . 8 福山空襲

ソ連が対日宣戦布告

8 . 9 長崎に原爆投下

8 . 1 4 日本 , 御前会議でポツダム宣言受諾を決定

8 . 1 5 玉音放送。国民に戦争終結を伝達



発行 倉敷市

〒710-8565 倉敷市西中新田 6 4 0

電話(0 8 6)4 2 6 - 3 1 2 1

ホームページ URL <http://www.city.kurashiki.okayama.jp/>

編集 倉敷市 総務局 総務部 総務課

発行日 平成 2 7 年 1 2 月